『西南アジア研究』No. 51, 1999

Akbar Nāmah と *Ṭabaqāt-i Akbarī*
―― manṣab 制度史研究序説 ――

真 下 裕 之

序

Akbar 時代史の史料として，Abū al-Faḍl b. Šayḫ Mubārak Nāgawrī, *Akbar Nāmah*（以下 AN）および Niẓām al-Dīn Aḥmad Harawī, *Ṭabaqāt-i Akbarī*[1)]（以下 TA）の価値を疑う余地はもはや全くない。前者は当代君主までのティムール朝史として，後者はインド地方史を総合するインド・イスラーム全史として，いずれも後のイスラーム・インドにおけ

1） 本稿で引用に用いたのは Bibliotheca Indica（以下 BI）刊本である。その他に，TA MS AMU；TA MS Rampur を適宜参照した。なお，BI 刊本のテキストには紀年に混乱がある。この点について筆者は以下の根拠ある結論に達している。すなわち，治世 21 年から治世 33 年までのそれぞれの条下に配された記事は機械的に一年ずつずれている，これらは実はそれぞれ治世 20 年から治世 32 年までの記事である，治世 33 年の記事は欠落している。これには，書写年代の古い TA MS AMU との対照が役に立った。これについては別稿の用意がある。本稿では TA を参照するに当たり，基本的にこの結論にもとづいて操作を行った。

また BI 刊本と上記両写本との間にはテキストの相違が数多い。それらは，他の同時代史料からの引証によって，後者に従い修正できる場合がほとんどである。さらに前者には，明らかに後代における付加と見なされる部分さえある。たとえば，Zayn Ḫān Kūkah の伝において BI 刊本は彼が病死し，莫大な遺産を残したことを伝えている［TA：ii, 431］。しかし彼の死去は 1601 年のことであって，TA 著作当時（1594）彼は存命であった。この記事は，1601 年以降を下る後代の手によらねば書かれ得ない情報である。当然ながら，TA MS AMU にはこの記事はない［TA MS AMU：f. 253v］。

著者の死去の年に書写された TA MS AMU の価値はたしかに高い。しかし，これも必ずしもすぐれた写本であるわけではない。上記の紀年の誤りからは TA MS AMU も必ずしも免れていない。また本来存在するはずの「Mālwah 諸王の章」を欠いている。さらに TA リストに関しては，TA MS AMU は，BI 刊本テキストの Rām Singh［TA：ii, 452］以降，33 名分の記事を欠く。TA MS Rampur においては，この部分の欠落は生じていないので，BI 刊本に見える部分が本来存在しなかったと断定することはできない。よってこの 33 名分の記事を本稿では採用した。

なお，TA の第二・三巻は佛教大学図書館恵谷文庫所蔵本を利用した。貴重書に分類された本書の利用を許可された同図書館関係者への謝意と敬意を特記する。また，NM, TA AMU MS の利用を許可された Maulana Azad Library（Aligarh Muslim Library）の Dr. Nurul Hasan Khan（Librarian），Dr. Jamal Abbas（Curator），TA MS Rampur および AN 写本 2064 / 45 M, 2066 / 1283 M の利用を許可された Rampur Raza Library の Dr. W. H. Siddiqi（Officer on Special Duty），Mr. A. S. Islahi（Asstt. Librarian）への謝意と敬意を特記する。

る史書の類型となった画期的な作品である。

ムガル朝の貴族制度たるmanṣab制度[2]のAkbar時代にかかわる基本資料として用いられてきたのは，AN最終冊で別著作のごとく伝わる所謂*Ā'īn-i Akbarī*（以下AA）に収載されるmanṣab-dārのリスト（以下AAリスト），およびTA「デリー諸王の章」末尾に収載されるアミールのリスト（以下TAリスト）である[3]。

しかるに，ほとんど同じ時期に作成された二つのリストが伝えるmanṣab-dārのmanṣab値の間に，無視しがたい相違があることには，早くBlochmannが気づいていた［AAtr: i, 596－604］。しかしこの相違についての説明は，以来十分になされてきたとは言い難い。この相違を確認したうえで情報の年代の相違に原因を求める立場［Habib 1968: 235－6］と，この相違そのものを捨象する立場［Moosvi 1981: 178］とが，他の議論との関連においてごく簡単に表明されているに過ぎない。

本稿の目的は，両リストのデータの相違という制度史研究上の深刻なこの問題について，一つの説明を提示することである。

リストの情報の相違を各々の情報の年代の相違に求める，検証されざる仮説が存在する以上，まずこれにあたるのが手順である。そのためには，各々を含む史料の成立の過程を手がかりに，両リストの年代を確定する作業が求められる（第二章）。また文献論的な背景を論ずる上で，両著者の履歴を対比する作業も必要である（第一章）。その上で，なされるべき基礎作業は，リストに言及されたmanṣab-dārたちの同定，履歴の再現を徹底的に行うことである（付表）。リストの検証は以上を踏まえて行われる（第三章）。

しかるに両リストに列挙されるmanṣab値はリスト作成時のスタティクなデータに過ぎない。それが生きたデータとしての意味を帯びるためには，manṣabが授与された時期が確定される必要がある。しかし史料では実際のmanṣab授与の記事をすべてのmanṣab-dārについて確認できるわけではない。そこで，manṣab-dārの死去の年代と両リストの年代と

2） 研究史はこの制度に，官僚制度，軍事制度，俸給制度など様々な形容を当ててきているが，いずれもいまだ検証されざる仮説である。制度運用の解明に集中してきた研究史の議論は制度の本質論には及んでいない。「貴族制度」とは，注3にあるとおりのamīrの術語の存在を根拠に，そうした形容の最大公約数としてさしあたり筆者が定めたものに過ぎない。manṣab制度について，現時点で最も水準の高い通時的概観は小名 1985。またAkbar時代のmanṣab制度の基本的な論点はQaisar 1961; Habib 1968: Moosvi 1981; Moosvi 1987でほぼカバーできる。

3） ムガル朝の国制において，アミールとはmanṣab 500以上を保有するmanṣabḍārを指した。しかるにTAリストの末尾に付された説明は明快である。

> 明らかなのは，500名の家臣（nawkar）を持っている宮廷の随臣がすべて，アミール位を与えられアミールの地位に叙せられるというわけではないということである。しかるにここで言及された人々は皆，その地位がアミールの位階（pallah）よりも高い人たちなのである［TA: ii, 456］。

それゆえにこそ，TAリストはアミールのリストである一方，下位のmanṣab 200の者の名まで収録するAAリストはmanṣab-dārのリストなのである。

を対照する方法により，スタティクなデータに動的要素を与えることにする。なぜなら物故者の manṣab は変更され得ないからである。そのため「付表」においては各 manṣab-dār の没年の確定に注意した。

manṣab-dār の評伝については，Blochmann の仕事がある［AAtr：i，320－594］。部分的にはなお有用なこの成果も問題点は少なくない。その主な理由は，18 世紀後半にデカンのニザーム政権のもとで編纂された二次的史料に過ぎぬ MU にほぼ全面的に依拠していることである。MU のソースとなった DhKh が公刊され，ほとんどの同時代史料も公刊され，それらの公刊テキストを写本に照らして検証することもまた可能となった現在の史料状況に照らし，Blochmann の提出した manṣab-dār の履歴はいまや各個，批判的に検証されるべきである[4]。

このように本稿は，両リストの成立の年代の検証，データの対照を通じて，manṣab-dār 制度の基本資料としての両リストの価値を批判的に評定することを目指すものである。今後の検証に耐えうる manṣab-dār 一覧の提示とあわせて，本稿が「manṣab 制度史研究序説」と副題する所以である。

I　両著者の履歴

史料そのものを論ずる前提として，両著者の履歴を検討しておく。両名の履歴の網羅的な再現は従来研究において行われているので，ここでは，両者の履歴の性質の違いを際だたせることに狙いを絞る[5]。

I－1

Abū al-Faḍl は AH 958. Muh. 6 / 1551. 1. 14 に Āgrah で生まれた［AA：ii，276］。同地に隠棲して，当代の知識人と交流する彼の父親は Šayḫ Mubārak である。彼が当時の一

4）Athar Ali 1985 は Akbar, Ǧahāngīr, Šāh Ǧahān 時代における manṣab 授与の網羅を試みる仕事。しかし欠陥は数多く，この目的にはほとんど使用にたえない。両リストに見える manṣab 値を，各リスト成立時に授与されたものとして扱う方法上の誤り，両リストの成立時期の特定に関わる手続きの不備（TA リストの成立を 1592 年としている同著の根拠は不明。後述の通り，筆者は 1594 年成立説に立つ），両リストの矛盾するデータの一方を無視する独断，個々の manṣab-dār の同定に関わる問題など。紙幅の都合から，個々の問題点を例示・検証することはできないが，ここでは最初の点，すなわち方法上の欠陥を指摘するだけで十分であろう。

5）Abū al-Faḍl については，その知的活動に関しては多くの論考があるけれども，宮廷人としての社会的な履歴についての考察はきわめて不十分である。この点について比較的バランスの取れた成果は Mukhia 1976, 41－88。古いが網羅的で便利なのは Blochmann による AA の解題［AA：i, i–xxii］。一方，Niẓām al-Dīn の履歴については Mukhia 1976, 132－153 の当該部分が唯一の記述。

大知性と見なされていたことはAbū al-Faḍlの言葉のみならず，他の同時代史料の言及からも確認できる事実である［MT：iii, 73；RT：581v（601v）；TA：ii, 344］。Abū al-Faḍlは父親に師事して早くから英才を閃かせ，父と兄弟たちに続いて1574年からAkbar宮廷に仕えた。

Abū al-Faḍl自身は，インドにおける自らの家系を五代前まで遡らせるが，確実にはわずか祖父までしか履歴を記していない。しかるに，祖父のČištiyyahシャイフとの交流［AA：ii, 259］，父MubārakのNaqšbandiyyahシャイフとの交流［AA：ii, 260；MT：ii, 74］のように，スーフィー・シャイフとの知的交流によって修飾された家系の来歴は，同時代のイスラーム社会における知識人の典型を示すものと考えられる。

ところで，初期のAkbar政権にはBābur，Humāyūn政権以来の家臣が多く参加している。しかるに，Šayḫ Mubārakは故地Nāgawrを出てGuǧarātでの修学の後，Sūr朝治下のĀgrahに隠棲する，という履歴をたどる。そこから判明するとおり，Abū al-Faḍlの家系はそうした譜代の家臣に属さない。過去の勲功を持たぬ新参者の栄達を保証するのは，新政権の必要とする能力である。Abū al-Faḍl個人がAkbar宮廷において果たした役割はこの要求に対応したものであったはずである。

そしてAbū al-Faḍlのそうした役割はAkbar政権で彼が担った官職に反映すると期待される。ところが，Abū al-Faḍlが国制上の何らかの職位を占めた形跡は諸史料に見いだせない。

1583－4	「訴願者たちに対する裁定（dāwarī-i dād-ḫwāh-ān）」に関わる職務を任される	AN：iii, 404
1586	Dihlī州（ṣūbah）のamīrの一人とされる	AN：iii, 511[6]
1589以降	不当に所有されているsuyūrġāl地の加減についてṣadrたるMīr Ṣadr-i Ǧahānに助言を行う	AA：i, 199
1599以降	皇子Šāh Murādの召還のためDakanに派遣される。その後，Dakan戦線を指揮。	AN：iii, 748

ややそれらしい以上のケースからは，Abū al-Faḍlのすぐれた政治手腕・行政能力を検出できるとしても，Akbar時代を通じて彼が何らかの官職を占めた事実は引き出せない。

一方，Abū al-Faḍlのmanṣab位の動向は明瞭に追跡できる。

6）このときには，帝国全12州（ṣūbah）それぞれにamīr 2名，dīwān, baḫšī 1名ずつが配置された。

1585	manṣab 1000	AN : iii, 457
1592	manṣab 2000	AN : iii, 610[7]
1595－6	manṣab 2500	AA : i , 224[8]
1600	manṣab 4000	AN : iii, 771
1602	manṣab 5000	TAN : iii, 805

彼が特定の官職になかった一方で，manṣab 位についてきわめて明確に記録されている。このことは Akbar 政権における彼の地位を制度上保証するものが他ならぬ manṣab であったということを意味する。上記の 1586 年の記事において彼が amīr とされたのも，500 位以上の manṣab-dār が amīr と呼ばれる制度の運用を反映しているに過ぎない。

とすれば，Akbar 時代，皇子・皇孫をのぞけば最高位 5000 とされていた manṣab 位を，まさにその最高位 5000 まで獲得した Abū al-Faḍl の立場を裏付けたものを，再び彼の履歴に立ち戻って問わねばならない。

Abū al-Faḍl が宮廷において行った職務の数々を振り返れば，宮廷・王室の内務にかかわるものが目立つ。

1578. 9	皇子たちのために牛を集める役【授乳のためか?】。	AN : iii, 251
1582. 10	腹痛を催した Akbar にギリシア医学（ṭibb-i Yūnānī）の処方での処置を進言	AN : iii, 395
1589－90	Kašmīr 遠征の途上，Akbar の bukāwul たちを臨時に統括	AN : iii, 540
1592	Sulṭān Ḫusraw の教授を担当	AN : iii, 604
1592	太陽暦に基づく恒例の賜与。Abū al-Faḍl は賜与の差配	AN : iii, 625
1596	闘鹿観覧中に負傷した Akbar の治療に参加	AN : iii, 712
1597	Kašmīr に向かう Akbar の妻妾たちの一団に夜警役（yatāqḍār）として付属	AN : iii, 724

特定の官職にない Abū al-Faḍl がこうした職務を行う裏付けは，その個人的能力に対して君主のかける個人的な信用関係以外にあり得ない。すなわち，君主の近臣としての地位である。ほとんど常に Akbar に付き従っていた Abū al-Faḍl が行ったその他の活動[9] も，

7） AH 1004. JumII. 23. / 1596. 2. 23. に完成した MT は，Abū al-Faḍl が最後に獲得した manṣab が 2000 であると言っているから［MT : ii, 206］，少なくともこの時期までは彼がその位階にあったことが知れる。

8） AA のクロノロジーについては後述。

9） 1581 : Šāh Manṣūr の処刑の手続き［MLC : 590］; 1584－5 : Šahbāz Ḫān の釈放の際の保証人↗

Abū al-Faḍl の行政能力を前提として，君主とのこうした関係においてなされたものであったと見なされる。そして manṣab-dār としての地位はその関係の反映であったことになる。

一方，複数の同時代史料が Abū al-Faḍl に与える 'Allāmī という綽名は，当代随一の知識人として尊敬される彼の位置を表わす。しかるにその知性もまた君主の期待する能力であって，その知性の活動の機会を保証したのは君主の保護であった。よって，Abū al-Faḍl の知的側面にかかわる履歴[10]もまた，Abū al-Faḍl の知識人としての素養を前提として，このような君主との個人的な関係の反映と見なされ得る。したがって，空前の史書 AN を生み出した Abū al-Faḍl の麗筆も，君主 Akbar とのこうした信用・保護関係において生かされたと考えられるべきである。

I－2

TA の著者 Niẓām al-Dīn Aḥmad Harawī の生年は，史料に伝わる没年時と享年から算出できる。すなわち死去は AH 1003. Saf. / 1594. 11 であり［AN：iii, 655；MT：ii, 396－7］，享年は 45 歳であった［MT：ii, 397］というから，生年を AH 958 / 1551－2 年に定めることができる[11]。つまり，Niẓām al-Dīn Aḥmad は Abū al-Faḍl とほぼ同じ時期に生まれたことになる。生地は分からない。

父親は Muḥammad Muqīm al-Harawī。Bābur 政権に所属して dīwān-i buyūtāt の職にあるが［TA：ii, 28］，それ以前の彼の履歴も，彼の父祖についての情報も諸史料には見えない。Bābur 幕下で同僚の貴族から彼が Tāǧīk と呼ばれている［TA：ii, 28］事実と，子と同じ Harawī というニスバからは，中央アジア出身のペルシア語使用者という大まかな像を見いだせる。Humāyūn 治世に彼は Mīrzā 'Askarī に仕えて Guǧarāt 遠征に参軍したが，その後 Humāyūn 政権の瓦解からインド再征服までの彼の活動は判明しない。だが Akbar 時代には少なくとも 1574 年まで，彼の活動が確認される［TA：ii, 207, 211；AN：iii, 90－1］。

Niẓām al-Dīn 本人の履歴は Abū al-Faḍl ほど詳しくはわからない。史料における最初の言及は，1567－8 年の Čitūr 攻略戦への参加である［TA：ii, 219］。その後，Abū al-Faḍl

---

↘［MT：ii, 323］；1588：史家 Aḥmad Tattawī の殺害事件の捜査［AN：iii, 527］；1588：Šahbāz Ḫān と Rāǧah Tūdar Mal との確執の調査［AN：iii, 529］；1592：Mīrzā Yūsuf Ḫān の身柄を預かる［AN：iii, 619］.

10) 1575－6：*Ḥayāt al-Ḥayawān* のペルシア語訳［MT：ii, 204］；1578－9：福音書（Inǧīl）の翻訳［MT：ii, 260］；1578－9：ゾロアスター教徒を模倣した聖火の管理を命じられる［MT：ii, 261］；1580－1：イエズス会士との宗教論議［MLC：570－2, 600, 607－8, 631, 639］；1583－4：*Tārīḫ-i Alfī* の編纂に関与してḫuṭbah を執筆［MT：ii, 318；AA：ii, 116］；1583－4：*Mahābhārat* のペルシア語訳にḫuṭbah を執筆［MT：ii, 319；TA：ii, 369］；1593：*Ǧāmi'-i Rašīdī*（*Ǧāmi' al-Tawārīḫ*）の要約を監修［MT：ii, 384］.

11) 太陽暦に基づいて生年を 1549 年としている［Mukhia 1976：132］は正しくない。

と同じく，1580－1年のKābul遠征に随行した後，1583－4年にGuǧarāt地方のbaḫšī職に任命されている［AN：iii, 403；TA：ii, 368］。1590年にAkbarによって召還されるまで彼はこの職にあり続けた。1592年，彼はKābul方面の反乱制圧に取り組むAkbar軍団のbaḫšīに任命され［TA：ii, 415；MT：ii, 380］，1594.11初旬にLāhūrで死去するまで彼はこの職にあった。同時代史料の多くが彼にbaḫšīの官職号を付けて言及することからも，Akbar政権における彼の履歴のほとんどすべては，同職に尽きるといえる。

baḫšī職について，AAから引き出せる職務内容は 1．陣営における拝謁の差配 2．親衛軍団の閲兵・俸給給付に関わる書類手続 3．騎馬の観閲 4．ǧāgīr および現金給与の給付に関わる書類手続 5．manṣab授与に関わる書類手続である。官職としてのbaḫšīはムガル朝以前のインド・イスラーム政権には存在しないので，同職がティムール朝の遺制であることは疑いない。すなわち起源においても実際の職掌においても，ムガル朝下のbaḫšī職は軍務関係の書記としての位置を占めている。Akbar時代のbaḫšī任官者たちのプロファイルに見えるのは，軍事遠征に同行する軍監としてだけでなく，文書行政に不可欠な書記学・会計学の素養を備えた実務者としての姿である［AN：i, 222；MT：iii, 277］[12]。

また父親の職位dīwān-i buyūtātは，政府の工務部局（kār-ḫānah）に所属しており，AAからは，それが部局職員の現金給与の文書処理に関与することが判明する［AA：i, 194］。よってこの職も実務者の範疇に属することが明らかである。

以上からは，二代にわたって実務者の職を占めた父子の姿が浮かび上がることになる[13]。Niẓām al-Dīnは，自らを「陛下の至高の宮廷における譜代（ḫāna-zād）のひとりであり，忠義の一門（iḫlāṣ nižād）のひとり」［TA：i, 1］だと言っている。その意味するところは，「（少なくとも）父の代よりティムール朝＝ムガル朝政権に仕えてきた中央アジア出身のタジク系実務者の一門の出身者」であるに他ならない。

12） ムガル朝において強い権限を獲得するbaḫšī職の位置づけはなお究明を要する課題である［Ibn Hasan 1936：210－233, 291－3；Köprülü 1942：236］。軍事要員・軍備維持に対する俸給の位階という形式をとるmanṣab制度との関わりにおいて同職の権限が拡大したことはおそらく確実である。即位間もないǦahāngīrが父の代からのmīr-i baḫšīを同職に任命した際の言葉は興味深い。

Šayḫ Farīd Buḫārīは私の父に仕えたmīr-i baḫšīであった。私は彼に，ヒルアと宝石をちりばめた刀と，宝石をちりばめたインク壺と筆とを下賜して，同じ職務に任命した。そして私は彼の賛美のために言った「私はあなたを刀と筆の主（ṣāḥib al-sayf wa al-qalam）だと思っている」［JN, 9 (6)］。

13） 母親の名は判明しないが，著者にとっての母方のおじ（ḫāl）にSulṭān Ibrāhīm Awbahīが見える［TA：ii, 449］。Awbahに由来するこのニスバを持つ者としては他に，亡命時代のHumāyūnのもとでmīr-i buyūtātないしmīr-i sāmānとして，さらにbaḫšī bīgīとして活動するḪwāǧah Ǧalāl al-Dīn Maḥmūdがいる。Niẓām al-Dīn父子を含め，こうした事例は，イラン亡命・アフガニスタン制圧を経て成立する第二次Humāyūn政権に，中央アジア・イラン出身のタジク系実務者が数多く参画してきたという仮説を支えるかもしれない。

そしてAbū al-Faḍlとの対比において史料を検査すれば，彼がmanṣabを授与された形跡は一切見いだせない。

I－3

16世紀半ばのほぼ同時期に生まれた二人の著者は，対照的な背景を持っており，形成期の帝国政権への関わり方もまた対照的であった。一方は，イスラーム諸学に通じた知識人として，父祖の過去の勲功ではなく，君主との個人的な信頼関係において国務にかかわり，manṣab-dārとしての栄達に及ぶAbū al-Faḍlであった。もう一方は，父子にわたって代々の政権に勤務した実務者として，形成期の国制における一官職を長く勤めたNiẓām al-Dīn Aḥmadであった。

治世35年初頭（1590. 3），Niẓām al-Dīn Aḥmadは召還に応じて，Kābul方面の戦役に取り組むAkbarのもとに参上した。この後，1594. 11に死去するまで，彼はAkbarの幕下にあり続けた。そして，このAkbar陣営にはすでに15年ほどにわたって仕えているAbū al-Faḍlがいたのである。

ところで，Akbarの下命により編纂が開始されたイスラーム世界史 *Tārīḫ-i Alfī* は，1588－9年まで著作が続けられていた。この史書はNiẓām al-Dīnを含む七名の史家による合同の著作として編纂され始めたものである［MT：ii，318－9］。一方，Abū al-Faḍlはこの七名とは別に，この史書にḫuṭbahを寄せている［MT：ii，318；AA：ii，116］。このように，国家事業として推進された修史事業において，両者は接点を持った。すなわち，二人の著者は史学の関心を共有し，交流しあう文化環境の中にあったことになる。

そのようなAkbar宮廷において，治世35年（1591）に開始される（後述）ANの著作事業をNiẓām al-Dīnは知ったものと思われる。すでにTAの冒頭でNiẓām al-DīnはANに言及し，Akbar時代史の詳細な記述についてはANに譲ると述べている［TA：i，2］。

このように，イスラーム・インドの史学史を画する二つの史書は，西北方面遠征に臨むAkbarの軍中で，ほとんど同時に著作されていったのである。

II　両書の成立と両リストの年代

本章においては，AN, TA両書の成立の経緯を確認することで，両リストの年代を確定する前提とする。

II－1

ANはAkbarの下命によって編纂が開始された。著作に当たり，諸方面に情報提供が命じられ，宮廷記録の参照がAbū al-Faḍlに許される［AN：i，9］。ANは国家事業として，君主の全面的な支援のもとに著作されたのであった。

Abū al-Faḍl 自身の語る構想によれば，AN は全五冊（daftar）からなる予定であるという。太陽暦の 30 年を一周期（qarn）と見なし，Akbar 生誕の年から 120 年間の四周期それぞれについて一冊ずつをあてて計四冊とし，最終冊第五冊に「王中の王の神聖なる諸規則（ā'īn-hā-yi muqaddas-i šāhanšāhī）」を収録する予定であると言っている［AA：ii, 257］。この最終冊こそ AA に他ならない。

AN 第二冊は，したがって，治世 47 年まですなわち 1602. 10 の記事まで含むことになっていたはずであるが，著者 Abū al-Faḍl が同年に暗殺されたため，現在残るテキストは治世 47 年の開始を示す記事までで終わっている[14]。こうして，AN は最終冊 AA を含めて全三冊で完結することとなった。はやくも Ǧahāngīr 時代において AA が「*Akbar Nāmah* 第三冊」と呼ばれている所以である［IAF：251］。

それでは，問題のリストが含まれる最終冊 AA はいずれの時期に完成したのであろうか。AN の作成過程にも関わるこの問題について通説として受け入れられているのは，Moosvi 1987 である。その要旨は以下のとおりである。

1．AA の完成は治世 42 年であると Abū al-Faḍl 自身が述べている。
2．AA の最も重要な部分である各州税査定表と manṣab-dār リストとが完成した年は Abū al-Faḍl によれば治世 40 年である。
3．Abū al-Faḍl は著作に七年を要したと言っている。
4．AN の写本には治世 33 年に著作が開始されたというヴァリアントをもつものがある。
5．AA の大部分が完成した治世 40 年を Abū al-Faḍl が完成の年と見なしたと考えれば，著作に七年を要したとの情報には矛盾しない。

著作の一部に過ぎぬ AA の完成年代を説明するのに，AN の著作開始の年代との整合性をはかる 4. 5. の議論はもとより無効だとしても，1. 2. 3. は裏付けうる議論であろうか。

AA の本文において，Abū al-Faḍl は完成年代に言及する。

> 永遠の王朝の始まりから，この目出たき冊（daftar）が完成の装飾を獲得した Ilāhī 40 年までに物故した著名人（rū-šināsān）について，500 manṣab までの者を記した。［AA：i, 231］

上記 2 の論の根拠となっているのはこの一節である。たしかにここで Abū al-Faḍl は治世 40 年（1595－6）に最終冊が完成したと言っている。しかし税査定表と manṣab-dār リストとについて，Abū al-Faḍl は何か特定した言及を行っているわけではない。したがって

14）これは［AN：iii, 803］四行目のバイトまでの部分。この点は，British Library, Add. 26207（17 世紀初頭）；Rampur Raza Library, 2064 / 45 M（not dated）；Rampur Raza Library, 2066 / 1283 M（not dated）などの諸写本から確認した。BI 刊本では，間をおかず TAN のテキストが連続しているので，判別が付かない。

前記の2.の論を支える根拠は存在しないことになる。

さて，Abū al-Faḍl が第一冊を完成させたのは 1596. 4. 26 であった［AN：ii, 376］。しかるに Abū al-Faḍl は，治世 42 年末（1598. 3）に執筆された最終冊結語（ḫātimah）では，完成した「一つの書物（kitābī）」について五度の修訂作業を行った後，Akbar の命令により提出したと述べている［AA：ii, 255］。

この kitābī とは，第一冊だけでなく，第二冊を構成する続編，および AA 部分を含む最終冊からなる AN 全三冊であったことは疑いない。なぜなら，同じ最終冊結語で，提出された五訂版が三冊であったと Abū al-Faḍl 自身が記しているからであり［AA：ii, 257］，第一冊の結語，第二冊の結語について言及しているからである（本文無しに結語のみが成立するはずはない）［AA：ii, 252］。加うるに，もしこの kitābī が第一冊のみあるいは AA のみを指すものであるなら，Abū al-Faḍl は，その著作において例外なく行っているとおり，daftarī と書いたはずである。

とすれば，Abū al-Faḍl は 1596. 4 に第一冊初稿を完成させた後，続編の執筆に取り組み，全三冊の著作全編に五度の修訂を加えて提出したことになる。

しかるに最終冊結語に言う。

> 七年間にわたり，Ādam から王中の王の神聖なる気質までのすべてが探求の上，書き記された。そして王中の王たる陛下の誕生から，Ilāhī の年が 42 に達し，陰暦においては 1006 年となった今日まで，かの幸福なる若木の 55 年にわたる事績がめでたくも完成して，著者の心はその重荷を肩よりおろすことができた。［AA：ii, 256］

「Ādam から王中の王の神聖なる気質までのすべてが探求の上，書き記された」とは，人類始祖 Ādam に始まる Tīmūr 家の系譜をたどり Akbar の事績の記述へと至る AN の第一冊および第二冊が完成したということを述べているのに他ならない。すなわちこの引証は，治世 42 年に完成したのは AA ではなく，AA を含んだ AN の著作全体であるという仮説を支えることになる。とするならば，そのような著作の事情を踏まえて書かれた最終冊結語は，AA 部分についての結語なのでなく，AN の著作全体に付せられた結語と見られるべきである。

そもそも，治世 40 年に完成している最終冊の結語が治世 42 年に書かれたと考えるのは，現行の巻構成に引きずられて，AA が AN の一部であることを見過ごした結果であると言う他ない。よって，上引の一節にもとづき AA 完成の年代を治世 42 年とする，上記 1 のごとき議論が成り立たないことは明白である。

さて，上記の引用から五訂版の完成の時日をほぼ特定できる。治世 42 年（1597. 3. 21－1598. 3. 20），AH 1006 年（1597. 8. 14－1598. 8. 3），Akbar 55 歳（1597. 10. 14－1598. 10. 13）[15] の時，すなわち 1597. 10. 14－1598. 3. 20 の間であると定めることができる。

15） Akbar の生誕は AH 949. Raj. 5 / 1542. 10. 14 である［AN：i, 18］。Ilāhī 暦に準じて Akbar の↗

さらに Abū al-Faḍl は，最終冊結語で，著作に七年をかけたとする［AA：ii，246；AA：ii，256］。これを逆算して，AN の著作開始を治世 35 年末（1591. 3）と定めることができる。

ところで AN の写本には著作の下命を治世 33 年と特定するヴァリアントをもつものが現在二点知られている（Royal Asiatic Society 写本；Sayyid ʻAli Bilgrāmī 氏所蔵の写本）[16]。著作の下命の時期と著作の開始の時期とが同じでない，との議論を立てない限り，AN の著作の開始を治世 35 年と確定した以上の議論に，このヴァリアントは矛盾する。

確かにわずか二つとはいえ，複数の写本に確認されるこの記事は，別の写本系統の存在を予感させはする。しかし，いずれの写本についても，書写年代その他の書誌的情報を確定・推定できる材料は提示されていない。Bilgrāmī 写本に至っては今日もはや写本を同定することさえ叶わない。したがって，上記の著作開始の年代を覆すための論拠としては，このヴァリアントの証拠能力はきわめて薄弱であると見なさざるを得ない。

さて，治世 42 年末に提出された五訂版は Abū al-Faḍl の当初の計画からすれば，未完成のものであった。なぜなら第二冊は，治世 47 年までの事績を含まねばならないからである。五訂版の提出が Akbar の強い要求に応じたものであることは，六訂版の作成をあきらめたという Abū al-Faḍl の言葉からも伺い知れる［AA：ii，256］[17]。

しかるに現存する第二冊は治世 47 年冒頭の記事までを含む。つまり，Abū al-Faḍl は五訂版提出の後も，所期の計画を達するべく，死の直前まで補訂を加え続けていた。

そしてこのことは，治世 40 年に完成した最終冊 AA が，その後も修訂を加え続けられていた事実と符合する。すでに正しく Moosvi 1987 が指摘するように，AA は治世 40 年以降でなければ記述し得ない内容を含んでいる。

↘年齢が数えられているので，かくのごとく提示できる。なお Akbar の誕生について［TW：54v］は AH 949. Shab. 14（土）とする異説を伝えている。Humāyūn の亡命に同行して Akbar の誕生に居合わせた同書の著者 Ǧawhar Āftāba-čī の情報にはそれなりの重みがあり，これを採用する説も存在する［Smith 1915］。しかし上記の日付と七曜日は一致しない。また同年 Ram. 8 の出来事として，そのときには Akbar が誕生してから 35 日が経っていたと［TW：56r］は記している。これは Akbar の生誕日を Shab. 14 とする［TW：54v］の記事に矛盾する。このように，TW の伝える年代には解決できない矛盾が複数存在する。よって本稿はこの記事を採用せず，Smith 1915 説も採らない。

16）この問題は Beveridge が提起したものであった［ANtr：i，33, note；Beveridge 1903］。すなわち，Royal Asiatic Society 所蔵の AN 写本（Codrington 1892：552, no. 117；Morley 1854：no. 112. Not dated）に，Abū al-Faḍl に史書編纂の命令が下った記事の部分に［AN：i，9］，その下命の時日を治世 33 年 Isfandārmiḍ. 22 と特定する記事が見いだせるというものである。さらに同写本には資料の提供を各方面に命じる命令が下った時日として，治世 34 年 Ardībihišt. 26 / AH 997. Raj. 3 という情報を挿入しているという。

17）Akbar の提出要求の背景は不明である。翌治世 43 年 1598. 6 のこととして Abū al-Faḍl は皇子 Salīm との確執をおぼろげに伝えている［AN，iii，740－1］。このことと AN 提出要求との間に関係があったのかもしれないが，それを裏付ける証拠はない。

AA: i, 148	治世42年に言及
AA: i, 386	Birār（治世41年に併合），Ḫāndīs（治世45年に併合），Aḥmadnagar（治世45年に併合）の征服と州（ṣūbah）編入について言及
AA: i, 455	治世43年，Dakanに派遣されたAbū al-Faḍlがmālwah地方に立ち寄ったことに言及

つまり，治世43年にDakanに送り出されたAbū al-Faḍlはその旅中においても，AN第二冊の続編を書き続け，同時にAN最終冊AAの修訂を行い続けていたということになる。AAの修訂はもちろん，変転する帝国システムの記述をアップデイトする必要に迫られてのことであるのは議論をまたない。

以上の議論から，ANの著作に関わるクロノロジーは，Moosvi 1987とことなる以下の再建に至った[18]。

1591. 3	AN著作開始
1595. 3－1596. 3	最終冊AA完成
1596. 4	第一冊初稿完成
1597. 10－1598. 3	五訂版（第一冊，第一冊結語，第二冊，第二冊結語，最終冊AA）完成
1598. 3	最終冊結語完成。AN全三冊提出。
～1602. 3	第二冊補訂。最終冊AA補訂[19]

18）最近の美術史研究の成果はこのクロノロジーに背馳し得る見解を出してきている。Victoria and Albert Museum所蔵のAN第一冊写本（IS, 2－1896, no. 117。同写本には自らの蔵書に受け入れる旨のAH 1014 / 1605年のĞahāngīrの親筆が見られる）に収載されるミニアチュールの作成年代について，[Okada 1992: 229; Rodgers 1993: 56] は1590年頃とし，[肥塚 1993: 27; 34] は1586－89年とする。[Beach 1981: 83－4] は様式の観点から1584年を遡るとの立場をとる。いずれの説に従うにせよ，本文の作成開始以前にミニアチュールは作成されていたことになる。

さらにBeach 1981は，AN以外の何らかのAkbarのbiographyのために作成されたミニアチュールがANに転用されたものとの仮説を提示している。たしかに1580年代から90年代のAkbar宮廷は修史の時代であった。'Abd al-Raḥīm訳*Bābur Nāmah*，イスラーム世界史*Tārīḫ-i Alfī*，ティムール朝史*Tārīḫ-i Ḫānadān-i Tīmūriyyah*などの史書が編纂された。後二者はAkbar時代の記事を含むものである。そして上三者のいずれにも壮麗なミニアチュールが付属していたことは現存する諸写本から確認できる。しかるに'Abd al-Raḥīm訳*Bābur Nāmah*がそうであるように，一つの作品の挿し絵付き写本はAkbar時代に複数作成された [Smart 1978; Smart 1986]。すなわち，そのような著作の諸写本の一つに用いられたミニアチュールが，ANに転用されたというBeach 1981の仮説を支持しうる状況証拠を我々は持っていることになる。

もしこのようなミニアチュールの可搬性という議論が成立するなら，美術史の提出するミニアチュールの年代と，本稿が提出するテキストの成立の年代とが必ずしも整合する必要はないことになる。

19）現行の第二冊結語が五訂版当時のものか治世46年の絶筆当時のものか，結語のテキストには判↗

ところで，1594年に完成した（後述）TAは問題のAAリストに言及している。

神の代理者たる陛下の，目出たくも善き行状の事録が済んだので，いまは，この至高の王朝に奉職していた高位のamīrたちの名前について記す。しかるに神の代理者たる陛下のamīrたちの名前の詳細はこの抄録に記すには多すぎるうえ，各人の名前の詳細は，学徳の避難所たる大学者（'allāmī）Šayḫ Abū al-Faḍlが，驚異の筆でもって*Akbar Nāmah*の書に記している。よって，この抄録においては偉大なるamīrたちの名前の記録を略述することにした［TA：ii, 425］。

1590年以降，Akbarに扈従していたNiẓām al-Dīnが，同じくAkbarに随従するAbū al-Faḍlの手によって1591年以降著作の進むANの一部を目にする機会があったと考えることは何ら不自然ではない。両者が史学的関心を共有する環境がAkbar宮廷に存在したことはI－3で言及したとおりである。すでに再建したクロノロジーも，上の引用から知れる事実に矛盾しない。すなわち，AAリストは早くも1594年には成立していたと考え得る。

AAリストについて残る問題点は以下の二点である。

1．AA全体の完成（1595－6）より後，Abū al-Faḍlが死の直前までAA全体に加えた補訂を蒙っていないか

2．1594年以前に完成して以後，AA全体が完成するまでに修訂を蒙っていないか

1．の問題に対しては，同時代史料に確認できる，治世41年（1596－7）以降に実際に授与されたmanṣabの数値をAAリストと対照することで解答を出せる。同年以降に行われたmanṣab授与の記事を年代順に並べてAAリストのmanṣab値と対照したのが以下である。

名　　前	年代	典　拠	典拠のmanṣab	AAのmanṣab
Zayn Ḫān Kūkah	1596	AN：iii, 701	5000	4500
Ṣādiq Ḫān	1596	AN：iii, 701	5000	4000
Šāh Qulī Ḫān Maḥram	1596	AN：iii, 701	4000	3500
Mīrzā Šāh Ruḫ	1597	AN：iii, 717	5000/ 2500	5000
Qulīğ Ḫān	1597	AN：iii, 721	4500	4000
Ismā'īl Qulī Ḫān	1597	AN：iii, 721	4000	3500
Mīrzā Ğānī Bīg	1597	AN：iii, 721	3500	3000
Šāh Bīg Ḫān	1597	AN：iii, 721	3500	3000
Sulṭān Dāniyāl	1597	AN：iii, 721	7000/ 7000	7000
Mīr 'Abd al-Wahhāb Buḫārī	1599	AN：iii, 748	500	—
Abū al-Faḍl	1600	AN：iii, 771	4000	2500

↘断の材料を見いだせない。なお，BI刊本に見える第二冊結語［AN, iii, 843－4］のテキストは［IAF, 243－251］に載るものと異なり，著しく短い。しかるにAdd. 26207その他の諸写本のテキストは後者に同じである。よって前者のテキストは原テキストとかけはなれたものである可能性が高い。

Fūlād Ḫān	1600	AN : iii, 771	1000	—
Ṣafdar Ḫān	1600	AN : iii, 772	1000	?[20]
Sādāt Ḫān	1600	AN : iii, 776	1000	—
Rāy PTR Dās	1601	AN : iii, 786	3000	700
Rāǧah Ǧagan-nāth	1601	AN : iii, 786	5000	2500
Mīr Ḫwāǧah	1601	AN : iii, 786	500	—
Ḫwāǧagī Muḥammad Ḥusayn	1601	AN : iii, 780	1000	500
Ḥusayn Bīg Šayḫ 'Umarī	1601	AN : iii, 790	2500	900

治世41年以降，絶筆の時点までほとんど毎年言及されるmanṣab授与19例について，AAリストに見える数値と一致するものは一つとしてない。著者たるAbū al-Faḍlのmanṣab値の変動さえAAリストに反映されていない。AAリストの値が，いつか一定時点のデータについてのスタティクな情報であることを勘案しても，このことは，AAリストがこの時期におけるmanṣabの変動を追跡していないというに等しい。したがって，AAリストはAAの他の各部分と異なり，治世41年以降行われた修訂を蒙っていないと断定できる。

2.の問題は，TAリストとの対照によって検証するのが適切なので，第3章で扱う。

II－2

ANが Akbarの全面的な支援を受けて著作された公式の史書であったのに対し，TAがそうした公的な保証を背景に編纂されたことは確認できない。むしろTAは，著者Niẓām al-Dīnの史学的関心に発したものであったと思われる。そしてその関心の焦点は，いまだインドにおいて登場していない，インド地方史を総合するインド・イスラーム全史という類型の歴史書の編纂なのであった［TA：i，2－3］。

さて，前述の通り，著者Niẓām al-Dīnは自著の冒頭でANに言及している。ANは1591年に著作が開始されているのだから，TAの著述の開始はそれ以降と考えられる。

一方，TAはAkbar朝の記事を治世38年（1593－4）まで収録している。そして，問題のTAリストは「Dihlī諸王の章（Ṭabaqah-i Salāṭīn-i Dihlī)」の末尾，Akbar朝の記事に後続して付せられている。これに寄せて，著者Niẓām al-Dīnは言う。

> 神の代理者たる陛下の事録がこの拙き筆の十分に記すところとなった。詳しいことについては，大海のうちの一滴，太陽のうちの一原子に過ぎぬとはいえ，神の代理者が王権の拠るべき台に着座してから38年目の最後まで，すなわちヒジュラ暦1002年まで，重大な事項のほとんどを収録した。もし齢を長らえ，目出たくも力があるならば，神の望む限り，将来の日々の事績をも記録して，このすぐれた書の一部にしようと思う。【中

20) この人物が同定できないことについては付表の注60を見よ。

略】神の代理者たる陛下の，目出たくも善き行状の事録が済んだので，いまは，この至高の王朝に奉職していた高位の amīr たちの名前について記す。[TA : ii, 424－5]

これにより TA リストは，治世 38 年末（1594. 3）以降の時期の現状を反映していることが判明する。一方，著者は治世 39 年中，1594. 11 初旬に死去しているのだから，TA リストの成立はそれ以前でなければならない。

しかるに，TA リストに含まれる記事から TA リスト成立の下限はさらに狭められる。

Mīrzā Yūsuf Ḫān について，「今日彼は Kašmīr の統治を任せられている」という記事が TA リストにある [TA : ii, 435]。一方，1594. 8 中旬に行なわれた人事異動の結果，Kašmīr が Aḥmad Bīg, Muḥammad Qulī Bīg らに与えられた結果，Kašmīr にいた Mīrzā Yūsuf Ḫān は Ǧawnpūr を与えられた [AN : iii, 654]。TA の上の情報はこの人事異動を踏まえていない。故に 1594. 8 中旬を，TA リスト成立の下限と見なすことができる。

一方，上限は以下の通り定められる。

上と同じ時期におこなわれた人事異動によって，Šarīf Ḫān は Ġaznīn の統治をおこなうべく派遣された [AN : iii, 654]。しかるに，TA リストの記事においては Šarīf Ḫān が Ġaznīn の統治をおこなっている（bi-ḥukūmat-i Ġaznīn kih waṭan-i ū-st sar afrāz-ast）と伝られている [TA : ii, 436]。現在形で書かれる後者の文章が書かれた際には，Šarīf Ḫān はすでに Ġaznīn 統治職にあったことになる。すなわち，TA リストの記事は，この人事異動を踏まえた情報である。ゆえに 1594. 8 中旬を TA リスト成立の上限と見なすことができる。

TA リスト成立の上限，下限がそれぞれ 1594. 8 中旬と定められた。同時期におこなわれた人事異動について，当時 Akbar に扈従していた著者 Niẓām al-Dīn が言及するものとしないものとがあるのが不自然にも見える。しかし，このことはかえって，記事作成のための情報収集がまさにこの時期に終わろうとしていた事実を反映しているものと解釈すべきだと思われる。こうして TA リスト成立の時期は 1594. 8 ごろと定めることができる[21]。

Ⅲ　両リストの検証

AA リストは 415 名について，名前のみを収録している。各 manṣab-dār は，保持している manṣab の値により，降順に配列されている。一方，TA リストには 202 名について，簡単な評伝が収録されているが，すべての者について manṣab 値が示されているわけではな

21）TA リストの作成時期について，Athar Ali 1985 は根拠を示さず，1592 年とした [Athar Ali 1985 : xiii]。以上の考察により，この説は支持できない。となれば，Athar Ali 1985 の manṣab-dār の任命表のうち，TA リストに基づいて 1592 年というクロノロジーを採用した部分は，ことごとく修正を余儀なくされるということになる。

い。数値が明示されているのは，そのうち114名である。アミールの配列はmanṣabの大小に関わりなくランダムであり，配列の規則を見てとることはできない。両リストの対照を目的とするので，付表はTAリストを基準にしている。manṣab-dārの名も原則としてTAに見える形で記した[22]。

さらにTAリストにおいてmanṣab値の言及されている者が必ずしもAAリストに現れるとは限らない。上記114名のうち，AAにも登場するのは94名である。以下では，これら94名の数値が検証の対象となる（これらについては付表においてmanṣab値をイタリックにして示した）。

さて，序で述べたごとく，従来研究には，AAリストとTAリストの相違を捨象する立場さえある。議論の前提として，この点を確認しておかねばならない。これら94名のmanṣab値が両史料でいかなる相違を見せているか，単純に数値を比較すると以下のようになる。

総数94　TA＝AA：34　TA＞AA：52　TA＜AA：8

両史料の情報は相違するケースが圧倒的に多いのであって，相違を捨象する立場[23]には到底立てないことは明白である。

ただし，数値が相違する60例について，数値が著しくかけ離れているケースはむしろ稀である（49 Muḥibb ʻAlī Ḫān；69 Qarā Bahādur Ḫān；78 Tūlak Ḫān Qawčīn；110 Farḥat Ḫānなど）。このことは，双方ともに拠るところの系統的なデータが現実に存在したことを反映するものと解釈される。

さて，仮に両リストとも，現実に授与されたmanṣab値を伝えているという前提が成立するならば，両リストの伝える情報の差は，情報の年代の差に還元せねばならないことにな

22）TAにおいて「～名の騎兵（sawār）を有している」とか「～名の家臣（nawkar）を有している」とかいう表現がmanṣab値を示しているという説［Moosvi 1981：178］には従わない。したがって上記114名には以下の7名は含まれていない（付表ではこの7名のTAの参照において-＊で示した）。23 ʻAbd al-Maǧīd Āṣaf Ḫān, 20000 sawār（［TA AMU MS：253v］では8000 sawār-i nawkar）；39 Rāǧah Tūdar Mal, 4000 sawār；47 Quṭb al-Dīn Muḥammad Ḫān, 5000 nawkar；50 Qulīǧ Ḫān, 4000 sawār；87 Maǧnūn Ḫān Qāqšāl, 5000 nawkar；102 Muḥammad Ḥusayn, 1000 nawkar；185 Aḥmad Bīg Kābulī, 700 sawār. もし，Moosvi 1981に従うなら，ʻAbd al-Maǧīd Āṣaf Ḫānについて，manṣab 20000（TA AMU MS：8000）を認定しなければならなくなる。しかしTA成立の時期において，manṣab値が5000を超過するのは皇子だけなのだから，この認定は不可能である。これが，Moosvi 1981に筆者が従わない理由である。［Moosvi 1981：184, n. 25］も上の表現をとる例を列挙しているが，問題のʻAbd al-Maǧīdの例はなぜか挙げられていない。

23）［Moosvi 1981：178］は，両リストのmanṣab数値が相違について，「わずか二十例をのぞけば，【TAの】リストはĀ'īnのものと同じmanṣabを載せている」としている。

る。今のところ有効な従来研究の提案［Habib 1968］はこの立場をとる。だがもしこの前提が成立しないなら，いずれかの史料が組織的に，現実の manṣab 値から乖離した情報を伝えているという論定が可能になるはずである。

Ⅲ－1

ここでは第一の前提に立って議論を進めてみる。ただし，治世 41 年以降における修訂はすでに否定されているのだから，年代は治世 40 年以前の時期に求められねばならない。

Ⅲ－1－1：前章で確認したとおり，治世 39 年に完成した TA は AA リストに言及している。このことを踏まえて，Habib 1968 は，1．すでに完成していた AA リストを TA が参照したが，その当時までに新たに生じていた manṣab の変動を反映し，当時の現状の manṣab 値を TA リストは収録した，そして 2．治世 40 年の完成までに生じた manṣab の変動を反映させるために AA リストに修正が加えらえた，との仮説を描いている。

確かに，治世 40 年以後でなければ入り得ない情報が AA リストの中に混入している。AA リストは Muẓaffar Ḥusayn Mīrzā Ṣafawī の manṣab を 5000 としている［AA：i，222］。Qandahār に依拠した彼は Mīrzā Muẓaffar Ḥusayn b. Sulṭān Ḥusayn Mīrzā b. Bahrām Mīrzā b. Šāh Ismā'īl Ṣafawī という系譜を持つサファヴィー朝の王子である。同朝内部の確執，'Abd Allāh Ḫān を戴く Ūzbik の侵攻という苦境を，彼は Qandahār を Akbar に割譲することで乗り切ろうとはかった。彼は Akbar に伺候し，manṣab 5000 を授与される。これが治世 40 年 Šahrīwar 月（1598. 8－9）のことであった［AN：iii, 670］。このような外交環境において，治世 40 年以前には決して，彼の伺候も manṣab 授与も生じ得ない。したがって，AA リストに彼の manṣab が収載されている事実は，たしかに治世 40 年時点での加筆を想定せずには説明が付かない。

ところが，おなじ治世 40 年に授与された Ṣadr-i Ǧahān の manṣab 1000［MT：ii, 404］は AA リストに反映されていない（AA リストでは 700）［AA：i，227］。この事実と，治世 40 年以降の補筆を確認させる例が上の一例に過ぎないという事実とは，治世 40 年に行われた修訂がごく部分的なものであったという仮説に我々を傾かせる。

TA リストの成立は治世 39 年半ばである。仮に，治世 40 年中に，現状の manṣab 値を反映するために AA リストが修訂されたのだと考えるなら，わずか一年ほどの間隔があるに過ぎない両リストのデータにあまりに大きな齟齬があってはならないことになる。しかるに，manṣab の変動が起きるとすれば，存命者であるに違いない。だから治世 40 年以降の死去が確実であり，かつ，両リストに manṣab 値が言及されている者を取り上げてみれば，この仮説を検証できることになる。

総数 42　TA＝AA：18　TA＞AA：20　TA＜AA：4

対照の結果は明瞭である。史料には，治世39年から40年にかけて，大規模なmanṣabの改変が行われたという事実は見いだせない。となれば，両リストにおいて全体の半数以上の情報が相違する上の事実に従い，治世40年時点でのAAリストに対する修訂などは，ほとんど行われはしなかったと断定できることになる。むしろ，Muẓaffar Ḥusaynについての言及が特殊なのであり，かかる特殊な言及・挿入は，隣国の王族の参上という特殊な事情が生んだものだと考えるべきであろう。したがってAAリストが治世40年の現状を写しているかのごときAbū al-Faḍlの言葉［AA, i, 231］（上記7頁）も，このようなごく微細な調整と治世40年におけるAA全体の完成という状況に起因するものと考えられる。

Ⅲ－1－2：TAがAAリストに言及している一方で，TA成立以降の時期にAAリストの修訂がほとんど行われていないとすれば，TA作成時のデータがAAリストとおなじであるかを対照する必要が生じる。両データがほぼ似通っていれば，AAリストはTA作成時とそれほど変わらぬ時期の情報を映しているということになる。逆にデータがかけ離れていれば，TA成立後の時期におけるAAリストのデータの改変が否定された今，AAリストのデータの年代を押し上げねばならないことになる。

この目的のためには，TA成立以前に物故していて，それ以降のmanṣabの変動が起こり得ない人物のmanṣab値を検証することが有効である。

総数41　TA＝AA：13　TA＞AA：24　TA＜AA：4

比較の結果からは両リストのデータの相違が明白である。したがって，AAリストのデータの年代はさらに押し上げねばならない。そして，AAリストとTAリストとの相違は，AAリスト成立後，TAリスト成立までの時期に生じたmanṣabの変動に起因するものであると前提しなければならなくなる。言い換えれば，AAリストが成立以降，manṣab値の変動を反映するために修訂されることはなかったことになる。同時に，TAリストがAAリストのデータを踏襲したという仮説も否定されることとなった。

Ⅲ－1－3：先に論じたとおり，AAを含むANの著作の開始は1591. 3に定められた。いま確認されたとおり，現行のAAリストが成立当時の状態を留めているとすれば，それ以前に死没した者のmanṣab値については，両リストのデータが相違することは一切あり得ないはずである（死没者のmanṣab値の変動はあり得ないからである）。もし，そのような相違が生じるとすれば，両リストのデータの相違を年代の相違で説明しようとする，本節の前提そのものが成立しないことが判明する。

この点の検証のためには，仮に，AAリストの成立を上限いっぱいにとって，1591. 3としたうえで，それ以前の死去が確実であり，かつ，両リストにmanṣab値が言及されてい

る者のデータを比較することが有効である。

総数 30　TA＝AA：9　TA＞AA：17　TA＜AA：4

この結果からは両リストのデータの相違が明白である。

以上，両リストがともに現実の manṣab 値を表現しているとする前提に立ち，両リストのデータの相違の理由を，各々の情報の年代の相違から説明しようと試みた。しかるに，TA 成立以降の AA リスト修訂という仮説は排除され，ついで，AA リストは成立以降，修訂を蒙っていないことが帰結した。にもかかわらず，相違しないはずのデータが両者の間で矛盾する。要するに，両リストのデータの相違は情報の年代の差異によって生じているという仮説は証明され得ない。同時にその前提に立ってなされてきた AA リストの年代を遡及させる操作の必要性は解消する。我々の手許に残る事実は，1594 年以前における AA リストの完成と治世 40 年におけるごく部分的な補訂のみである。

Ⅲ－2

となれば，当然，我々は，両リストがいずれも現実の manṣab 値を表現しているとする前提そのものを疑わねばならなくなる。

両リストのいずれかが現実の manṣab 値を反映していないという仮説は，後代の二次的な史料が，両リストに収載される manṣab-dār の manṣab 値をいかに載せているかから，完全ではないにせよ検証することができるはずである。

ここでは DhKh を検証の材料として用いよう。Šāh Ǧahān 時代初頭，AH 1059（1649－50）～AH 1061（1650－1）に成立した［DhKhtr：xxi］この史料は，三部構成のうちの第一部に Akbar 時代のアミール伝を載せ，一部の者についてはその manṣab も伝えている。manṣab 値の情報源については，著者自身は言明していない。しかし，著者が AN（ひいては AA），TA を知っていたことは本文での言及から明白である［DhKh：i，67；201，202］。

一方 DhKh は，TA に manṣab が収載されていない者については，AA とおなじ情報を載せる一方[24]，AA に manṣab が収載されていない者については TA とおなじ情報を載せている[25]。ここからは DhKh が場合に応じて TA，AA 両リストの情報を取捨している事実

24）付表の以下の者たちの例を見よ。14 Mīr Muḥammad Ḫān Atagah［DhKh：i，248］；19 Pīr Muḥammad Ḫān［DhKh：i，101］；20 Rāǧah Bhārah Mal［DhKh：i，103］；25 ʻAbd Allāh Ḫān Ūzbik［DhKh：i，209］；39 Rāǧah Tūdar Mal［DhKh：i，212］.

25）付表の以下の者たちの例を見よ。32 Tursūn Muḥammad Ḫān［DhKh：i，211］；Kamāl Ḫān Gakhar［DhKh：i，216］；73 Nawrang Ḫān［DhKh：i，218］；80 FTW Afġān［DhKh：i，218］；82 Fatḥ Ḫān Fīl-bān［DhKh：i，218］；91 Rāǧah Askaran［DhKh：i，219］；92 Rāy Lawana Karna［DhKh：i，219］；141 ʻAlī Dūst Ḫān Bārbīgī［DhKh：i，230］；148 ↗

が伺える。よって，DhKh の著者が両リストを情報源として参照していたことは疑いないと考えられる。

しかるに，両リストの情報が相違するケースは60例あり，そのうち，DhKh でも manṣab 値が言及されるのが43例である。このうち，DhKh が TA と同値を伝えるのが25例であるのに対し，AA と同値を伝えるのはわずか1例に過ぎない。この事実は，著作後およそ50年を経て両リストを参照した後代の史家にとって，AA よりも TA の数値の方が採用すべき，実際の manṣab 数値を表しているものと判断されたことを示すものに他ならない。

一方，TA，AA が同値を伝えているにもかかわらず，DhKh がそれとは異なる数値を伝えているケースが17例ある。このうち少なくとも13例が TA 成立（1594）以降の死去であることから，DhKh の異なるデータは TA 成立以降の manṣab 変動を反映したものと考えられる。すなわち，DhKh は TA，AA の情報を批判的に検証するための情報と判断基準を持っていたことになる。とすれば，相異なる AA，TA 両説のいずれかを採用するにあたって示された DhKh の上記の判断もそうした判断基準に基づいて行われた，信頼に値するものだと考えられるのである。

顧みれば，TA リストが AA リストと根本的に異なる点は，リストに収載した人物のすべてについて manṣab 値を記しているわけではないことである。すなわち，TA リストの狙いは，manṣab 値の列挙ではない。一方，AA リストの立場は異なる。帝国制度志の一部に組み込まれ，manṣab の順序で整然と配列されたそのリストは，王朝の柱石たる人士の一覧として，一定程度包括的なものでなくてはならない。包括・網羅という責務を背負わされた AA リストは，まさにそのことゆえに矛盾する諸要素を抱え込むことになった。

すでに Qaisar 1961 : 156 が正しく指摘するように，治世18年に manṣab 制度が導入される以前に死去し，本来 manṣab を保持するはずがなかったはずの者たちまでもが AA に言及されている[26]。

彼らの manṣab 値は Qaisar 1961 の言う通り，死後の栄誉として与えられたものに他ならない。死者に manṣab を与えて記述するという，組織的な作為の裏にあるのは，AA リストに課せられた制度記述という責務に他ならない。しかもそのリストは著作当時，存命の者たちが保持する manṣab 値とも整合しなければならなかった。

↘ Muḥammad Zamān [DhKh : i , 231] ; 149 Ḫurram Ḫān [DhKh : i , 231]

26) 1 Bayram Ḫān [AA : i , 225] ; 3. Tardī Bīg Ḫān [AA : i , 223] ; 7 ʻAlī Qulī Ḫān [AA : i , 223] ; 8 Adham Ḫān [AA : i , 223] ; 10 Šams al-Dīn Muḥammad Ḫān Atagah [AA : i , 223] ; 13 Bahādur Ḫān [AA : i , 223] ; 19 Pīr Muḥammad Ḫān [AA : i , 223] ; 23 ʻAbd Allāh Ḫān Ūzbik [AA : i , 223] ; Yūsuf Muḥammad Ḫān Kūkah [AA : i , 223] ; 38 Ḫwāǧah Sulṭān ʻAlī [AA : i , 224] ; 107 Ḫwāǧah Ṭāhir Muḥammad [AA : i , 225] ; 145 Sayyid ǦHǦW Bārhah [AA : i , 227] ; 146 Darbār Ḫān [AA : i , 227]。

両リストの年代差が情報の差をもたらしたとする仮説はすでに成立しない。さらに，後代の史料がAAリストのデータに対してTAリストのデータを採用する場合が圧倒的に多いという事実が確認された。その上で，AAリストに見られるこのようなmanṣab値の組織的な操作とその背景とを踏まえれば，我々の結論は，AAリストが現実のmanṣab値を伝えているのではない，という点に到着する。

したがって仮に，AAリストが何ほどかの事実を伝えているとすれば，治世40年当時，著者Abū al-Faḍlないしは，帝王Akbarの意図にあった，あるべきmanṣab-dār制度の序列がそこに表現されているということなのである。manṣab値がTAに記述されながら，AAに現れないmanṣab-dārが存在するのは，このことに起因すると説明されうる。

とはいえ，最初に確認したとおり，AAリストのデータがTAリストと著しくかけ離れている例はかえって少ない。すなわちAAリストの数値も，現実の数値を全く無視したAbū al-Faḍlの創案というわけでもない。むしろ，現実の数値に即して，改変・調整を行ったAbū al-Faḍlの手続きがそこに反映していると見なされるべきであろう。

AA完成の翌年，治世41年，manṣab制度は大きな転機を迎える。それまで単一の数値で表示されてきたmanṣabは，二重の数値をもって表示されることになった。いわゆるḏāt値，sawār値の導入である[27]。これ以前に完成されたAAリストはむろん単一数値のシステムに従っている。よって，AAリストは，制度の改変のゆえに没時代的なものとなり，以後修訂されることもなくAAの中に放置されたものと考えられるのである。

結

本稿の目的である両リストのデータの相違については，AAリストが現実のmanṣab値に作為を加えたデータを伝えていることが原因である，との説明が得られた。帝国システムを記述する制度志AAは，帝王Akbarに献呈されるべく，制度のあるべき堅牢かつ厳密な姿を映し出す責務を負っていた。したがって，AAリストにおいては，至高の王朝に関わった貴顕たちは，最上位から最下位まで，死没者も存命者も，新たなる貴族制度manṣab制度の中に，整然たるヒエラルキーをもって取り込まれ，記述される必要があったのである。

よってmanṣab制度の史料として，AAリストのデータは，貴顕のあるべき序列として

---

27) 治世41年における二元数値導入説［Moosvi 1981］は，現在の史料状況では揺るがせる余地がない。manṣabの二元表示の初出は治世41年の記事にすでに見える［AN: iii, 717］。にもかかわらず，この時期以降においても，ANその書において，manṣab授与は二元数値でなく単一数値で記録されるケースがほとんどである。Ǧahāngīr時代初頭には二元数値による表示が恒常化しているが，それに至るAkbar末年のmanṣab表示の運用につき，今のところ，明確な説明は与えられていない。

Abū al-Faḍl ないし Akbar の心中にあった理念を検出する限りにおいて有効である。そして Abū al-Faḍl がいかなる基準に基づいて manṣab 値を操作したのかは，今後，個別の manṣab-dār について検討されるべきである。その作業は，Akbar 時代の政治史における諸集団の動向を再構成する，別の課題に接続するものとなるであろう。

また，この結論によって我々は，Akbar 時代の制度史史料としての AA 全般に対する視角を得たことにもなる。さらに，AN と TA の立場の相違についての仮説も，従来の研究では看過されていた点である。ほとんど同じ時期に成立し，それぞれの類型においてその後のイスラーム・インド史学史の規範となる二つの史書は，形式と著作の意図とにおいて大きく相違する。これらの史書が，君主・宮廷との個人的な関係において，新たな帝国貴族制度の中で栄達に及ぶ知識人と，帝国行政制度の中でのキャリアを全うした実務者とによってそれぞれ著作されたことは，決して偶然ではないだろう。栄光高き王朝史・制度志の記述が前者に期待されるのは当然のことであった。のみならず，イスラーム諸学に通じ，イスラーム・インドの代表的なインシャー文献として後代まで読み継がれることになる文章（IAF）を残した Abū al-Faḍl の麗筆もまた，旭日のごとく全インドに覇権を唱える王朝の栄えある事績を飾るにふさわしいものであったのである。

このように，ほとんど同時期に成立した二つのリストに見える数値の相違は，情報の年代の相違に起因するのではなく，こうした形成期の帝国における二人の史家と二つの史書の立場の相違を反映するものと考えられるのである。

付　表

- ref. AA の欄には AA,i のリストにその人物が言及されている位置を示した。書式は (page),(column)/(line) である。
- AA の欄で、- は、AA において言及がないことを示す。また ? は、人物の同定に確証がないために判断を保留したことを示す。
- DhKh の欄で、- は DhKh においてその人物について項目を立てた言及があるが man.sab 数値が述べられていないことを示す。また / は、DhKh においてその人物について、項目を立てた言及がないことを示す。
- 没年の欄で、複数の選択肢がある場合、年代を / で区切ってある。「～」は年代の期間を示す。a ～ b は a 年以降 b 年以前、～ c は c 年以前、～ d は d 年以降を示す。なお、～年以降とは、典拠にあげた記事がその人物の活動についての最後の言及であることを根拠にしている。これについては、煩雑さを避けるために、脚注にそれを述べることはしなかった。
- 典拠の欄では、その人物の死去の年代を確定する情報の典拠を示す。年代の決定および人物の同定に関する考証は必要に応じて脚注で示した。
- manṣab の表示において (数) / (数) という形は、前項が ḏāt 値、後項が sawār 値による二元表示が行われていることを示す。

no.	ref.	name	TA	AA	ref. AA	DhKh	没年	典拠
1	ii,425	Ḫān-i Ḫān-ān Bayrām Ḫān Sipah Sālār	-	5000	222,b/25	5000	1561	TA:ii,150; AN:ii,131
2	ii,426	Mīrzā Šāh Ruḫ	*5000*	*5000*	222,b/21	-	1607	JN:68-9(56) [1]
3	ii,426	Tardī Bīg Ḫān	-	5000	223,a/01	/	1556	AN:ii,32
4	ii,426	Munʿim Ḫān Ḫān-i Ḫān-ān	-	5000	222,b/26	-	1575	AN:iii,160
5	ii,426	Mīrzā Rustam	*5000*	*5000*	222,b/24	5000	1638-9	DhKh:i,100
6	ii,426	Mīrzā Ḫān Ḫān-i Ḫān-ān	-	5000	223,a/18	4000	1627	JN:504(417) [2]
7	ii,427	ʿAlī Qulī Ḫān Ḫān-i Zamān	-	5000	223,a/02	-	1567	AN:ii,294; TA:ii,211
8	ii,427	Adham Ḫān	-	5000	223,a/08	-	1562	AN:ii,174; MT:ii,52 [3]
9	ii,427	Mīr Šaraf al-Dīn Ḥusayn	-	5000	223,a/06	-	1580-1	AN:ii,325-6 [4]
10	ii,427	Šams al-Dīn Muḥammad Ḫān Atagah	-	5000	223,a/04	-	1562	AN:ii,174; MT:ii,52 [5]
11	ii,428	Muḥammad ʿAzīz Kūkaltāš	*5000*	*5000*	223,a/10	7000/7000	1624-25	JN:477(395) [6]
12	ii,428	Ḫiḍr Ḫwāǧah Ḫān	-	-	-	-	1558-9/ 1563 ～	MU:i,615; AN:ii,202 [7]
13	ii,428	Bahādur Ḫān	*5000*	*5000*	223,a/11	-	1567	AN:ii,292-6
14	ii,428	Mīr Muḥammad Ḫān Atagah	-	5000	223,a/05	5000	1575	AN:iii,163 [8]
15	ii,428	Muḥammad Qulī Ḫān Barlās	-	5000	223,a/20	-	1574 ～ 1575	AN:iii,121; TA:ii,304 [9]
16	ii,428	Ḫān-i Ǧahān	*5000*	*5000*	223,a/13	5000	1578.12 末	AN:iii,263; TA:ii,341,428; MT:ii,267 [10]
17	ii,429	Šihāb al-Dīn Aḥmad Ḫān	*5000*	*5000*	223,a/15	5000	1590.10-1591.03	TA:ii,429; AN:iii,584
18	ii,429	Saʿīd Ḫān	*5000*	*5000*	223,a/14	5000	1612-3 ～	JN:127(109) [11]
19	ii,429	Pīr Muḥammad Ḫān	-	5000	223,a/09	5000	1562-3	AN:ii,168; TA:ii,157
20	ii,429	Rāǧah Bahārah Mal	-	5000	223,a/12	5000	1573 ～ 1594	AN:iii,43; TA:ii,429 [12]

[1] JN によれば彼の死去は AH 1016.RabII.25 / 1607.08.19. Athar Ali1985,46 は AH 1015 年としているが誤り。

[2] JN では Ǧahāngīr 治世 21 年 (1626.03 - 1627.03) の条の終わりの方に配置されているから、同年後半のこととと思われる。同じ箇所には彼の死去は AH 1036 年 (1626.09.22 -) の半ばであると記されている。ということは、西暦ではすでに 1627 年に移っていた時期と考えてよいだろう。MJ:525 は AH 1036 年のはじめと伝えるが、言及の詳細さを根拠に JN に従った。Athar Ali1985,88 は JN:504(417) を引きながら AH 1035 / 1625-6 としているが、根拠は不明。

[3] AN, MT は AH 969.Ram.12 と伝えるが、TA:ii,158 は AH 970.Ram.12 とする。明らかに後者は、本来 AH 969 とあった部分が AH 970 と機械的に書き換えられたもの。

[4] 治世 25 年中の死去と伝える AN は日付を特定していないが、言及の位置から判断すれば、1580 年中の死去と思われる。

[5] 年代に関する史料操作は Adham Ḫān と同じ。

[6] JN:477(395) を引く Athar Ali1985,86 が彼の死去を AH 1033 / 1623-4 とする根拠は不明。

[7] MU は AH 964 (1556-7) 年に彼が Bihār に赴き、その 2 年後に死去したとする。一方、AN では、AH 971.JumI.28 / 1563.01.13 に Dihlī で何者かに矢の狙撃を受けた Akbar に手当を行った者として Ḫiḍr Ḫwāǧah Ḫān の名が挙がっている。とすれば、同人の死去はそれ以降でなくてはならない。二名の Ḫiḍr Ḫwāǧah Ḫān を想定する他の根拠はないので、ここでは両説を併記する。

[8] TA:ii,428 は Pīr Muḥammad Ḫān Atagah と載せるが、TA MS AMU および TA MS Rampur のテキストにより、Pīr を Mīr と改めた。他の諸史料に見える形も Mīr である。

[9] AN は Akbar 治世 19 年 Day 月半ば頃の出来事として伝える。これは 1574.12 下旬から 1575 年初頭にかけての時期。一方、TA は Akbar 治世 20 年初頭と伝える。これは 1575.03 ごろ。事件の詳細な記述の中で年代を明らかに設定している AN の情報を採用した。

[10] AN:iii,263 は治世 23 年 Day.08 という日付を伝える。これは 1578.12.20 すなわち AH 986 年半ば頃にあたる。他方、TA の評伝の中では AH 986(1578.03.10 -) 年中の死去との情報がある (TA:ii,428)。しかるに TA の本文では治世 24 年の条下に配されて、「治世 24 年に当たる 987 年の末」とある (TA:ii,341)。TA において、治世 24 年の条下の記事は治世 23 年 (1578.03.10 -) の記事と考えられるべきであることから、AH 986 年と伝える TA:ii,428 の情報の正しさは裏付けられる。なお、この部分について TA MS AMU:225v は「治世 25 年に当たる 987 年のはじめ」としているが、誤伝である。Akbar 時代史についてほとんど TA に依拠している MT は彼の死去を「987 年はじめ」と TA MS AMU の誤った情報をそのまま伝えている (MT:ii,267)。Athar Ali1985,7 が AH 987 年としているのは MT:ii,267 に従ったものと思われるが、それを採用するに至る史料批判の手続きは不明。なお、Athar Ali1985 の同じ箇所で挙げられる AN:iii,265 という典拠は上記のごとく AN:iii,263 と修正するべき点である。

[11] Ǧahāngīr 治世 7 年に活動しているのが確認できるので (JN)、それ以降の死去である。

[12] AA では BHARY Mal という形で現れる。TA 著作当時、彼は死去していた (TA:ii,429)。

21	ii,430	Rāǧah Bhagwān Dās	*5000*	*5000*	223,a/16	5000	1589	AN:iii,570; TA:i,409,430[13]
22	ii,430	Rāǧah Mān Singh	*5000*	*5000*	223,a/19	-	1614	JN:151(130)
23	ii,430	ʻAbd al-Maǧīd Āṣaf Ḫān	-*	*3000*	223,b/18	-	1568 ～ 1594	AN:ii,324; TA:ii,219 [14]
24	ii,430	Sikandar Ḫān Ūzbik	-	-	-	/	1572-3	AN:iii,20; TA:ii,430
25	ii,430	ʻAbd Allāh Ḫān Ūzbik	-	5000	223,a/03	5000	1566-7 ～ ほどなく	AN:ii,271; TA:ii,430
26	ii,430	Qiyā Ḫān Gang	-	5000	223,a/22	-	1581.02-3	AN:iii,341; TA:ii,431; MU:iii,56 [15]
27	ii,431	Yūsuf Muḥammad Ḫān Kūkah	-	5000	223,a/07	-	1566	AN:ii,272
28	ii,431	Zayn Ḫān Kūkah	*5000*	*4500*	223,a/24	-	1601	AN:iii,796 [16]
29	ii,431	Šuǧāʻat Ḫān	*5000*	*3000*	223,b/20	5000	1580	AN:iii,312; TA:ii,353,431[17]
30	ii,431	Šāh Budāġ Ḫān	-	3000	223,b/21	-	1578 ～ 1594	AN:iii,237; TA:ii,431 [18]
31	ii,432	Ibrāhīm Ḫān Ūzbik	*4000*	*2500*	224,a/10	/	1567-8 ～ 1594	AN:ii,326; TA:ii,432 [19]
32	ii,432	Tursūn Muḥammad Ḫān	5000	-	-	5000	1584-5	AN:iii,432-4; TA:ii,432
33	ii,432	Wazīr Ḫān	*5000*	*4000*	223,b/08	5000	1586-7	TA:ii,432
34	ii,432	Muḥammad Murād Ḫān	-	3000	223,b/23	-	～ 1594	TA:ii,432 [20]
35	ii,432	Ašraf Ḫān	-	2000	224,a/21	-	1575	AN:iii,160
36	ii,432	Mahdī Qāsim Ḫān	*5000*	*4000*	223,b/03	/	1569 ～ 1594	AN:ii,336; TA:ii,432 [21]
37	ii,433	Qāsim Nīšāpūrī	-	4000	223,b/07	-	1564-5 ～ 1594	AN:ii,224ff.; TA:ii,433 [22]
38	ii,433	Ḫwāǧah Sulṭān ʻAlī	-	3000	224,a/01	/	1571-2	NM:317r [23]
39	ii,433	Rāǧah Tūdar Mal	-*	4000	223,b/06	4000	1589	AN:iii,569; TA:ii,409,433; THA:371 [24]
40	ii,433	Mīrzā Qulī Ḫān	-	-	-	-	1575	AN:iii,121
41	ii,433	Muẓaffar Ḫān	-	4000	223,b/04	-	1580	AN:iii,304; TA:ii,351 [25]
42	ii,434	Ḫaydar Muḥammad Ḫān	-	2500	224,a/12	/	1575	AN:iii,160
43	ii,434	Šāham Ḫān Ǧalā'ir	*2000*	*2000*	224,b/20	3000	1600	AN:iii,774
44	ii,434	Ismāʻīl Sulṭān Dawladay	-	2000	224,a/19	-	1556 ～	AN:i,350; TA:ii,434 [26]
45	ii,434	Muḥammad Ḫān Ǧalā'ir	-	-	-	-	1594 ～	AN:i,350; TA:ii,434 [27]

[13]AN は治世 34 年 Āḏar.15 / 1589.12 初旬との日付を伝える。一方、TA:i,430 は AH 996 年 (1587.12.02 - 1588.11.19) と伝える。TA:i,409 はしかし、治世 34 年の条下にこの出来事を配している。よって、TA:i,430 の紀年は誤記と断定できる。

[14]彼が 20000 騎を保有していたと記す TA:ii,430 に対し、TA MS AMU:253v は 8000 騎と記す。史料に見える彼の最後の活動は 1568.2 のこと。TA:ii,430 は彼の事績について、imrūz bi-martabah-i imārat rasīdah 「今日、彼はアミールの地位に達した」と記す。しかし、ここは TA MS AMU:253v および TA MS Rampur:121r に従い、imrūz を bi-murūr と修正し、「時の経過とともに彼はアミールの地位に達した」と訳すべきである。そうでなければ、1568 年の活動が史料上確認しうる最後となる彼の履歴に照らして、TA 著作の 1594 年当時に彼が存命であったというのは何としても不自然である。

[15]AN は治世 25 年 Isfandarmiḏ 月 (1581.02-3) の死去と伝える。一方、TA は AH 984(1576-7) 年中の死去と伝える (TA のテキストは、TA MS AMU および TA MS Rampur でも同じ)。MU は AH 989 年 (1581-82) の死去と伝え、AN の情報を支持する。ここでもそれを採った。

[16]TA 成立時に彼が存命であったという明白な事実にも関わらず、TA:ii,431 は、彼が病死し莫大な遺産を残したとの記事を載せている。この情報は、後代に付加されたものにほかならない。当然ながら、TA MS AMU:253v はこの矛盾する情報を含まない。

[17]AN は治世 25 年 Tīr 月はじめ (1580.06) との情報を伝える。TA:ii,353 で、彼の死去は治世 26 年の条下に配されているが、先の史料操作により、これは治世 25 年の記事と考えられるので、AN の情報に矛盾しない。しかるに、TA:ii,431 は AH 996(1587-8) と伝え、TA MS AMU:254r も同じ情報を伝えるが、これは明らかな誤伝と見られる。

[18]TA 著作時には彼は死去していた (TA:ii,431)。

[19]TA 著作時には彼は死去していた (TA:ii,432)。

[20]TA 著作時には彼は死去していた (TA:ii,432)。AN:iii,289-90 で 1580.1-2 の記事に見える Murād Ḫān がこの人物に同じかもしれないが、確証がないので判断を保留する。

[21]TA の著作当時には死去していた (TA:ii,432)。

[22]治世 9 年 (1564-5) に Mālwah 遠征に参加しているのが最後の記事。TA:ii,433 は彼が Mālwah で死去したと伝えているから、彼はこの遠征において死去したのかも知れない。

[23]彼は疑いなく、KLAHY なる雅号を持つ Afḏal Ḫān のことである (MT:iii,317)。ただし MT の KLAHY は間違いで NM:167r に従い、Kalāmī とすべきか。MT によれば、彼は AH 977 / 1569-1570 年に生じたシーア主義者弾圧におそれをなして、Dakan に去ったとある。そして、NM:167r によれば、彼は AH 979 / 1571-2 年に Dakan で死去した。

[24]AN が伝えるのは治世 34 年 Ābān.28(1589.11 下旬)。THA は AH 998(1589-90) とし、AN に矛盾しない。TA:ii,409 も治世 34 年の条下に彼の死亡記事を配し、AN に矛盾しない。よって、ひとり AH 996 と伝える TA:ii,433 (TA MS AMU:254v でも同じ年代) の情報は排除して問題ないだろう。

[25]TA の記事は治世 26 年の条下にあるが、実際は治世 25 年の記事である。

[26]インド再征服を成し遂げた Humāyūn の軍団に彼が所属しているのが最後の言及である (AN)。TA は彼が Akbar に仕えていたと伝えている。

[27]治世 4 年 (1559-60) の記事での言及が最後 (AN)。「脳の欠陥を生じて気がふれてから数年経つ」という TA の書き方からは、政

46	ii,434	Ḫān-i ʻĀlam	*2000*	*3000*	224,a/03	-	1575	AN:iii,124; TA:ii,434 [28]
47	ii,434	Quṭb al-Dīn Muḥammad Ḫān	-*	5000	223,a/17	-	1583	AN:iii,422
48	ii,435	Mīrzā Yūsuf Ḫān	*4000*	*4500*	223,b/01	5000	1601	AN:iii,800
49	ii,435	Muḥibb ʻAlī Ḫān	*4000*	*1000*	225,a/09	4000	1581-2	TA:ii,435
50	ii,435	Qulīǧ Ḫān	-*	4000	223,b/09	-	1613	JN:144(123)
51	ii,435	Muḥammad Ṣādiq Ḫān	*4000*	*4000*	223,b/10	5000	1597	AN:iii,720
52	ii,435	Mīrzā Ǧānī Bīg Tarḫān	*3000*	*3000*	223,b/16	5000	1601	AN:iii,783
53	ii,435	Ismāʻīl Qulī Ḫān	*3000*	*3500*	223,b/14	3000	1597 ～ 1605	AN:iii,721; DhKh:i,213 [29]
54	ii,436	Iʻtimād Ḫān Guǧarātī	*4000*	*2500*	224,a/13	-	1586-7	TA:ii,436
55	ii,436	Rāy Rāy Singh	*4000*	*4000*	223,b/11	5000	1612	JN:124(106)
56	ii,436	Šarīf Muḥammad Ḫān	*3000*	*3000*	224,a/08	5000	1602-3 ～	AN:iii,654 [30]
57	ii,436	Faḫr al-Dīn	*3000*	*2000*	224,b/11	3000	1579	AN:iii,263; TA:ii,436 [31]
58	ii,436	Ḥabīb ʻAlī Ḫān	-	-	-	/	1562-3	TA:ii,436 [32]
59	ii,436	Šāh Qulī Ḫān Maḥram	*3000*	*3500*	223,b/13	5000	1601	AN:iii,799
60	ii,437	Muḥibb ʻAlī Ḫān Ruhtāsī	4000	-	-	5000	1589	AN:iii,553; THA:370; TA:ii,437 [33]
61	ii,437	Muʻīn al-Dīn Aḥmad Ḫān	-	1000	225,b/11	3000	1575	AN:iii,160 [34]
62	ii,437	Iʻtimād Ḫān Ḫwāǧah Sarāy	-	1000	225,b/01	3000	1577-8	TA:ii,437
63	ii,437	Dastam Ḫān	-	2000	224,b/02	-	1580/1582-3	AN:iii,326; TA:ii,437 [35]
64	ii,437	Kamāl Ḫān Gakhar	5000	-	-	5000	1564-5	TA:ii,437; MU:iii,148 [36]
65	ii,437	Ṭāhir Ḫān Mīr Farāǧat	*2000*	*2000*	224,b/17	3000	1577-8 ～ 1594	AN:iii,217; TA:ii,437 [37]
66	ii,438	Sayyid Ḥāmid Buḫārī	*2000*	*2000*	224,b/01	/	1586	AN:iii,510
67	ii,438	Sayyid Maḥmūd Ḫān Bārhah	*4000*	*2000*	224,a/22	5000	1574	AN:iii,77; TA:ii,438 [38]
68	ii,438	Sayyid Aḥmad Ḫān	-	2000	224,b/14	3000	1577-8	TA:ii,438
69	ii,438	Qarā Bahādur Ḫān	*4000*	*700*	226,b/21	4000	1564 ～	AN:ii,231 [39]
70	ii,438	Bāqī Muḥammad Ḫān Kūkah	*4000*	*3000*	224,a/05	4000	1584	AN:iii,436; TA:ii,438
71	ii,438	Sayyid Muḥammad Mīr-i ʻAdl	-	900	226,a/04	-	1578	AN:iii,249
72	ii,439	Maʻṣūm Ḫān Faranḫūdī	*2000*	*900*	226,a/21	2000	1582	AN:iii,390
73	ii,439	Nawrang Ḫān	4000	-	-	4000	1594	AN:iii,651 [40]
74	ii,439	Šāh Muḥammad Ḫān Atagah	2000	?	-	4000	1588-9	TA:ii,439 [41]
75	ii,439	Muṭṭalib Ḫān	*2000*	*2000*	224,b/06	3000	1588-9	TA:ii,439 [42]
76	ii,439	Šayḫ Ibrāhīm	*2000*	*2000*	224,b/05	1000	1585	AN:iii,468
77	ii,439	ʻAlī Qulī-ḫān Andarābī	*2000*	*1000*	225,b/06	2000	1560 ～ 1594	AN:ii,112; TA:ii,439 [43]
78	ii,439	Tūlak Ḫān Qawčīn	*2000*	*900*	226,a/22	/	1596	AN:iii,711

治的キャリアをすでに失いながらも、TA 著作当時いまだ存命であったと推測できる。

[28]彼の名について、AA:i,224 は Ḥalīm Bīg とするが、AA MS:116v は ĞLMH Bīg とする。このうち、後者が正しく、Čalmah Bīg とされるべきであることは、AN:i,331; THA:159 から確定できる。

[29]同時代史料に見る最後の言及は治世 42 年 Farwardīn.18(1597.04) の記事 (AN)。一方、DhKh は、彼が Akbar 治世中に死去していたと伝える。

[30]TA:ii,436 においては彼の manṣab 数値は特定されていないが、TA MS AMU:255r および TA MS Rampur:121v により 3000 という数値を補える。

[31]TA は AH 986(1578.03.10 -) の死去と伝える。しかるに AN は治世 23 Day.11(1578.12 下旬) に彼が Guǧarāt 方面に派遣されたことを伝えているから、死去はその後でなければならない。

[32]この人物について TA MS AMU は記載していない。AA:i,225 に言及される manṣab 1000 の Ḥabīb ʻAlī Ḫān とは別人である。後者は治世 27 年中、1582.04-5 の戦闘に参加している Ḥabīb ʻAlī Ḫān b. Muḥibb ʻAlī Ḫān に他ならない。AH 970 / 1562-3 に死去したと TA が伝える Ḥabīb ʻAlī Ḫān がこれと同じ人物ではあり得ない。

[33]AN は治世 34 年 Amurdād 月 (1589.07-8) と伝え、THA もそれを支持する。TA および TA MS AMU:255r は AH 996(1587-8) とするが、これは誤りとすべきであろう。

[34]彼は Faranḫūdī のニスバを持つ (AN:iii,160)。だから彼は AA:i,225 に見える Muʻīn Ḫān Faranḫūdī に同定できる。

[35]AN は治世 25 年 Ābān.10 (1580.11) と伝える。一方、TA は AH 990 (1582-3) とする。いずれかに断定するための材料はない。なお、彼の名を TA:ii,437 は Rustam Ḫān とするが、TA MS AMU:255r がするとおり、Dastam Ḫān が正しい。AA:i,224, 230 は Rustam とするが、それに対応する AA MS:117r, 118v ではいずれも Dastam。これを Dastam とすべきであるという見解は、TAtr:ii,664 も AAtr:i,435 も同じ。Athar Ali1985 は Rustam としているが、従えない。

[36]MU は AH 970 (1562-3) 年と伝えるが、これは採れない。治世 9 年 (1564-5) に彼が活動する記事が見えるためである。

[37]治世 22 年中の記事に言及がある (AN)。TA 著作当時には彼はすでに死去していた (TA:ii,437)。

[38]AN は治世 18 年 (1573.03-) の遠征事業の後、しばらくして死去したと伝える。一方、TA は AH 982 (1574.4.23 -) としている。彼の死去は AH 982 年に入って後のことであったと考えるのに無理はない。

[39]Athar Ali1985 は AA に見える Qarā Bahādur と TA のそれとを別人であると考えているが、根拠は不明である。

[40]死去は 1594.6 のこと。すなわち TA の完成前である。

[41]TA:ii,439 は彼が Ḫān-i Aʻẓam Šams al-Dīn Muḥammad Atagah の弟であると伝える。これが AA:i,224 にみえる Šāh Muḥammad Ḫān Qalātī と同じ人物であるか否かは結局確認できない。

[42]AA:i,224 では Abd al-Muṭṭalib Ḫān とされている。

[43]TA 著作当時には死去していた (TA:ii,439)。TA:ii,439 は彼のニスバを ANDRA'Y とするが、TA MS AMU:255v および AN により、Andarābī と修正できる。

79	ii,440	Šāh Bīg Ḫān Kābulī	*3000*	*3000*	224,a/02	5000	1594 ～	JN:355(312) [44]
80	ii,440	FTW Afǧān	2000	-	-	2000	1575 ～ 1594	AN:iii,130; TA:ii,440 [45]
81	ii,440	Bābū Manglī	*1000*	*700*	227,a/20	/	1592-3 ～	AN:iii,616 [46]
82	ii,440	Fatḥ Ḫān Fīl-bān	2000	-	-	2000	1582-3	TA:ii,440
83	ii,440	SMAĞY Ḫān Muǧūl	2000	?	-	2000	?	[47]
84	ii,440	Darwīš Muḥammad Ūzbik	*2000*	*2000*	224,b/04	2000	1560 ～ 1594	AN:ii,197; TA:ii,440 [48]
85	ii,440	Šahbāz Ḫān Kanbū	*2000*	*2000*	224,b/03	7000/7000	1599	AN:iii,764 [49]
86	ii,441	Ḫwāǧah-i Ǧahān	-	1000	225,a/12	2000	1574	AN:iii,109; TA:ii,302,441[50]
87	ii,441	Maǧnūn Ḫān Qāqšāl	-*	3000	223,b/19	5000	1575-6 ～	TA:ii,302
88	ii,441	Muḥammad Qāsim Ḫān	*3000*	*3000*	224,a/04	3000	1596-7	AN:iii,702 [51]
89	ii,441	Muẓaffar Ḥusayn Mīrzā	*1000*	*700*	226,b/22	/	1601 ～	AN:iii,787
90	ii,441	Rāǧah Ǧagan-nāthah	*3000*	*2500*	224,a/15	3000	1609-10	Athar Ali1985 [52]
91	ii,441	Rāǧah Askaran	3000	-	-	3000	1602-3 ～	TAN:821
92	ii,441	Rāy Lawana Karna	2000	-	-	2000	1585-6	TA:ii,441
93	ii,442	Mādhū Singh	*2000*	*1500*	225,a/04	3000	1605-6 ～	JN: 11(7)
94	ii,442	Ġiyāṯ al-Dīn ʻAlī Āṣaf Ḫān	-	1000	225,b/08	3000	1581-2	TA:ii,442
95	ii,442	Pāyandah Ḫān Muǧūl	*2000*	*2500*	224,a/14	2000	1615	JN:167(144)
96	ii,442	Mubārak Ḫān	*1000*	*900*	226,b/11	1000	1596-7 ～	AN:iii,702
97	ii,442	Bāz Bahādur Afǧān	*2000*	*1000*	225,b/02	3000	1570-1 ～ 1594	AN:ii,358; TA:ii,442 [53]
98	ii,442	Mīrak Ḫān Ǧang-ǧang	-	-	-	/	1577-8	TA:ii,442
99	ii,442	Tardī Ḫān	*2000*	*1500*	225,a/01	/	1604-5 ～	TAN:827
100	ii,442	Sayyid Qāsim	*2000*	*1500*	225,a/05	2000	1599	AN:iii,757
101	ii,443	Rāǧah KHNGAR	2000	-	-	/	1591-2 ～	AN:iii,593 [54]
102	ii,443	Muḥammad Ḥusayn	-*	2000	224,b/13	-	1575	AN:iii,127; TA:ii,307,443[55]
103	ii,443	Ḥusayn Ḫān Tukriyyah	*2000*	*3000*	223,b/22	2500	1575-6	AA:iii,143 [56]
104	ii,443	Ǧalāl Ḫān Ghakhar	*1500*	*900*	226,b/10	2000	1620	JN:349(307)

[44]彼の履歴は DhKh:i,235-7 によって確認できる。一方、AA には二人の Šāh Bīg が見える。Šāh Bīg Ḫān b. Ibrāhīm Bīg ḪRMK (AA:i,224: manṣab 3000) および Šāh Bīg Ḫān b. Kūčik ʻAlī Ḫān Badaḫšī (AA:i,226: manṣab 900)。同時代史料に登場する Šāh Bīg Ḫān について、すべてを検索しても、Šāh Bīg Ḫān Kābulī を上二者のいずれに同定するべきか、決定的な証拠は結局得られない。これを同定する材料は MU にまで下らねばならない。MU によってこの人物は、前者に同定できる。ただし MU:ii,642-645 は Šāh Bīg Ḫān Arǧūn という名前で彼の評伝を収録している。AAtr:i,408-410 も Athar Ali1985 もこれに従い、彼の名に Arǧūn を付している。しかるに、同時代史料は同時代に活動する Šāh Bīg Ḫān Arǧūn なる人物を一切載せない。しかも Šāh Bīg Ḫān Kābulī に言及する DhKh:i,235-7 も Ǧahāngīr 時代の史料も Arǧūn を付してはいない。よって MU の Arǧūn 説は MU に至って初めて登場した解釈と見なされるべきである。

[45]TA 著作当時には死去していた (TA:ii,440)。

[46]AAtr:i, 528 は JN:169(136) に見える Manglī Ḫān が彼に同じだとし、Ǧahāngīr 時代にも存命であったとするが、確証はない。

[47]彼の名は諸史料には SMANĞY との形で現れることが多い。これを Samānčī とする AAtr:i,458 の語釈を見よ。AA には二人の SMANĞY Ḫān が見える。SMANĞY Ḫān b. ČMLH Bīg (AA:i,224: manṣab 1500) および SMANĞY Ḫān Qūrġūčī (AA:i,226: manṣab 900)。前者の父の名については、対応する AA MS:117v に見える ḪLMH という形から、まず疑いなく、前出の Čalmah Bīg の名を再建できる。Čalmah Bīg は Mīrzā ʻAskarī の kūkah であり (MS:52)、Mahdī Ḫān の親類 (ḫwīš) であった (AN:i,262)。しかるにこの Mahdī Ḫān とは Mīrzā ʻAskarī に仕え、Akbar 治世では 4000 位の manṣab-dār となった Mahdī Qāsim Ḫān に他ならない。一方、THA:185 に見える SMAĞYN Muǧul はおそらく、SMAĞY Ḫān Muǧūl に同じであると思われ、同じ箇所で彼は Ḥāǧǧī Muḥammad-i Bābā Qašqah の近親 (qarābat) であるとされている。疑いなく Muǧūl に属する Ḥāǧǧī Muḥammad-i Bābā Qašqah (BN:379,592) と Mahdī Qāsim Ḫān ないし Čalmah Bīg を結ぶ材料は史料に存在しない。この事実は SMAĞY Ḫān Muǧūl が SMANĞY Ḫān b. Čalmah Bīg ではなく、SMANĞY Ḫān Qūrġūčī であると推定させる材料である。しかし、同時代史料に見える SMANĞY Ḫān が上二者のいずれであるか、現段階ではまったく判別できない。よって没年は確定できない。MU では SMANĞY Ḫān を Qūrġūčī とする一方でその manṣab 位を 1500 とする混同をおかしているために、その記事は信頼に値しない (MU:ii,401-2)。MU に依拠し、矛盾した記述を載せる AAtr も同じく信頼できない (AAtr:i,458, 489-490)。

[48]AN では Bayrām Ḫān の反乱 (1560) についての記事で言及されている。これが最後の言及。TA の著作当時彼は死去していた (TA:ii,440)。

[49]DhKh の数値については要検討。Athar Ali1985 は Maulana Azad Library (Aligarh Muslim University), Habib Ganj 32/74 写本に基づいて 2000/2000 としている。一方、National Museum, Karachi 写本と上記の 32/74 写本と校訂本とを校合しつつ翻訳した DhKhtr:107 は注釈もなく *1000/1000* としている。諸写本を検証できない今、にわかには結論を出しがたい。なお、DhKh を参照しているはずの MU は「100 manṣab から amīr の地位に昇った」(MU:ii,590-1) と、manṣab 位には言及していない。

[50]TA:ii,441 は彼の名を MYN al-Dīn Muḥammad とするが、TA MS AMU:255v によって Amīn al-Dīn Maḥmūd と修正できる。この点は AN:ii,96 によっても裏付けられる。彼の死去の年代を、TA:ii,441 は AH 983 とする一方 (TA MS AMU:255v も同じ)、TA:ii,302 は治世 19 年中、AH 982.Shab. はじめ (1574.11.) とする。しかるに AN が治世 19 年ĀbAn.03 (1574.10 末) と伝えるので、後者を採用する。TA MS AMU が日付に関して誤伝している例の一つである。

[51]TA:ii,441 において Mīr Baḥr と言及されるこの人物は、Muḥammad Qāsim Ḫān Nīšāpūrī (AA:i,223) ではなく、Qāsim Ḫān Mīr-i Baḥr (AA:i,224) に同定される。

[52]Athar Ali は AH 1018/1609-10 年の死去としている。典拠は *Vīr Vinod*. この史料は筆者未見。

[53]TA 著作当時には彼は死去していた (TA:ii,442)。

[54]AAtr:i,483 は、TA 著作当時に彼が死去していたと推定しているが根拠に乏しい。

[55]AN は治世 19 年 (1574.03-) 末とする。TA:ii,307 は治世 20 年中、AH 982.DhH.20 / 1575.04.02 の戦闘での負傷がもとで死去したと伝える。一方 TA:ii,443 は AH 983 年中の死去とする。AH 982 年中の戦闘で負傷し、AH 983 年中に死去したと考えれば無理はないだろう。この戦闘を AN は治世 19 年の最末期のこととして収録している。彼の死去が治世 20 年に生じていたとしても、戦闘に関連する情報として治世 19 年の条下に配されたと考えることができる。したがって、ここでは TA:ii,443 に従った。

[56]彼の名を TA:ii,443 は Ḥasan Ḫān Tukrī とするが、TA MS AMU:256r に従い修正した。この形の正しさは AA:i,223 によっても検証できる。よって Athar Ali1985 がこれを Ḥasan Ḫān としているのは誤り。

105	ii,443	Sa'īd Ḫān Ghakhar	1500	-	-	2000	1594 ～	TA:ii,443 [57]
106	ii,443	I'tibār Ḫān Ḫwāǧah-sarāy	*2000*	*2000*	224,b/07	/	～ 1594	TA:ii,443; MU:i,65 [58]
107	ii,443	Ḫwāǧah Ṭāhir Muḥammad	-	1000	225,a/13	-	1567-8	TA:ii,443 [59]
108	ii,444	Mūtah Rāǧah	*1500*	*1000*	225,b/03	-	1595	AN:iii,669
109	ii,444	Mihtar Ḫān Ḫāṣah-ḫayl	*1500*	*1500*	225,a/02	3000/3000	1609	JN:88(73)
110	ii,444	Farḥat Ḫān Ḫāṣah-ḫayl	*2000*	*900*	226,a/09	2000	1576-7	AN:iii,169
111	ii,444	Ṣafdar Ḫān Ḫāṣah-ḫayl	2000	?	-	/	?	[60]
112	ii,444	Bahār Ḫān Ḫāṣah-ḫayl	-	2000	224,b/10	2000	1593	AN:iii,633
113	ii,444	Rāysāl Kačhwāhah	*2000*	*1250*	225,a/07	/	1605-6 ～	JN:11(07)
114	ii,444	Rāy Durgah	*1500*	*1500*	225,a/03	2000	1607	JN:77(63)
115	ii,444	Maqṣūd 'Alī KWR	-	1000	225,b/19	2000	1580-1 ～ 1594	AN:iii,304; TA:ii,444 [61]
116	ii,444	Iḫlāṣ-ḫān Ḫwāǧah-sarā	*1000*	*2000*	224,b/09	2000	1578-9	AN:iii,697 [62]
117	ii,445	Mihr 'Alī Ḫān Sūldūz	*1500*	*1000*	225,b/13	2000	1584-5 ～ 1594	AN:iii,445; TA:ii,445 [63]
118	ii,445	Ḫudāwand Ḫān Dakhanī	*1500*	*900*	226,a/15	3000	1589	AN:iii,550; MT:ii,372; TA:ii,445 [64]
119	ii,445	Mīr Murtaḍā Dakhanī	*1000*	*900*	226,b/02	1000	1602-3 ～	TAN:825 [65]
120	ii,445	Ḥasan Patanī Afǧān	*1000*	*500*	227,b/16	1000	1585-6	AN:iii,485; TA:ii,445 [66]
121	ii,445	Naẓar Bīg	*1000*	*500*	228,a/19	2000	?	[67]
122	ii,445	Rāǧah Gūpāl	2000	-	-	2000	1590	AN:iii,574
123	ii,445	Qiyā Ḫān Ṣāḥib Ḥasan	*1500*	*700*	227,a/02	2000	1561 ～ 1594	AN:ii,134; TA:ii,445 [68]
124	ii,445	Sayyid Hāšim Bārhah	*1000*	*900*	226,a/07	2000	1584	AN:iii,425
125	ii,446	Riḍawī Ḫān	*1000*	*900*	226,a/05	/	1580 ～ 1594	AN:iii,294; TA:ii,446 [69]
126	ii,446	Rāǧah Bīrbar	*2000*	*2000*	224,b/08	-	1586	AN:iii,485 [70]
127	ii,446	Šayḫ Farīd	*1500*	*1500*	224,b/23	5000	1616	JN:184(159)
128	ii,446	Rāy SRǦN	*2000*	*2000*	224,b/19	-	1583-4 ～	AN:iii,404 [71]
129	ii,446	Ǧa'far Bīg	*2000*	*2000*	224,b/21	3000	1612	JN:127(108)
130	ii,446	Rāǧah Rūpsī SRAKY	*1500*	*1000*	225,a/20	1500	1575-6 ～	AN:iii,163 [72]
131	ii,446	Fāḍil Muḥammad Ḫān	*1500*	*900*	226,a/20	2000	1573-4	AN:iii,43
132	ii,447	Šāh Qulī Nāranǧī	*1000*	*500*	228,a/03	1000	1566-7 ～	AN:ii,272
133	ii,447	Šayḫ Muḥammad Buḫārī	*2000*	*2000*	224,a/24	-	1573/ 1573-4	AN:iii,25; TA:ii,447 [73]
134	ii,447	La'l Ḫān Badaḫšī	-	500	227,b/05	1000	1575	AN:iii,160
135	ii,447	Ḫanǧar Bīg Čaǧatā	-	-	-	-	1558-9 ～	AN:ii,66

[57]TA 著作当時には存命である。

[58]没年を定める材料は乏しい。TA は彼が Dihlī を統治していた頃に死去したと伝える。MU は彼が治世 2 年、Dihlī 統治を命じられ、のちに同地で死去したと伝える。

[59]TA:ii,443 は彼が Tātār Ḫān を号していたと伝えるので、Tātār Ḫān Ḫurāsānī (AA:i,225) に同定できる。死去の年代として、MU:i,471 は AH 986 / 1578-9 年との年代を伝えるが採らない。治世 12 年 (1567-8) 年に Dihlī 統治に当たっているとの情報が同時代史料における最後の言及だから (AN:ii,288)、TA の情報の方がより確からしい。

[60]同時代史料において同定できない。AA:i,230 の Ṣafdar Bīg b. Ḥaydar Muḥammad Ḫān Aḫtah Bīgī に同じかも知れないが確証はない。

[61]TA 著作当時には死去していた (TA:ii,444)。

[62]治世 40 年の記事で、その 17 年前に彼が死去していたとの記事に基づく (AN)。

[63]TA 著作当時には死去していた (TA:ii,445)。

[64]AN は治世 34 年 Tīr.01 / 1589.06 下旬と伝える。MT は死去の紀年詩を載せる。Ḫudāwand Dakhanī murdah. これを換算すれば 1003 となるが、Dakhanī の綴りを Dakanī と改めれば 998 が得られる。AH 998 / 1589.11.- は AN の与える年代に大きく矛盾はしない。なお TA が伝える AH 995 はまったくの誤り。

[65]彼は Sabzawār 出身のサイイド (AA:i,226) だが、当初、Dakan の 'Ādil Šāh さらに Niẓām Šāh に仕えていたために Dakhanī のニスバを有する。

[66]TA:ii,445 は彼のニスバを BYTY Afǧān としている。TA MS AMU:256v は PNY としている。AA:i,227 は Ḥusayn Ḫān Batanī としている。なお AN:iii,485 に見える Paťanī の形にあるごとく、この時代の写本に転舌音 ť を表記する書法があるかは疑わしい。さらに AA:i,227 の Ḥusayn は AA MS:117v によって Ḥasan と修正できる。また Ḥasan の後には TA MS AMU:256v は Ḫān を補う。彼の没年については、TA が彼が Baǧawr, Suwād の Afǧān との戦闘において戦死したと伝え、かつ治世 30 年の対 Afǧān 戦役で戦死した者の中に見いだせる Ḥasan Paťanī (AN) が彼を指すことから定められる。

[67]Sa'īd Ḫān Ghakhar の子である (TA:ii,445) 彼の系譜については AAtr:i,544 を見よ。

[68]TA 著作当時には彼は死去していた (TA:ii,445)。

[69]TA 著作当時には死去していた (TA:ii,446)。

[70]彼の名は Bīrbar および Bīrbal と、史料・写本により形が相違する。ここでは TA に見える形に従った。

[71]彼の名を TA:ii,446 は Rāǧah SRǦN とするが TA MS AMU:256v に従い修正した。同時代史料において、Rāǧah SRǦN とする例は他に見られないからである。

[72]彼の名を TA:ii,446 は Rāǧah RWSY SRAKY とする。RWSY は TA MS AMU:256v は Rūpsī とし、AA:225 もそれを支持する。一方、SRAKY については TA MS AMU:256v は SRAKY とする一方、AA:225 は BYRAGY とし、AA MS:117r は PBRAKY とする。結論は出せない。

[73]AN の記事からは彼が治世 17 年中 (1572-3)、AH 980.Ram.18 / 1573.01.23 以降に起こった戦闘で戦死したことが判明する。一方、TA は AH 981 年と伝える。AH 981 は治世 17 年に重ならないので、両説は矛盾する。現段階ではいずれとも定めることはできない。

136	ii,447	Maḫṣūṣ Ḫān	*2500*	*2500*	224,a/16	2000	1604-5 ～	TAN:832; MU:iii,325 [74]
137	ii,447	Ṯānī Ḫān	-	500	227,b/12	-	1582-3 ～	MT:iii,207 [75]
138	ii,447	Mīrzā Ḥasan Ḫān	-	900	226,a/13	-	1598	AN:iii,742 [76]
139	ii,447	Ǧagat Singh	*1500*	*900*	226,a/24	1500	1599	AN:iii,763
140	ii,448	Mirzā Niǧāt Ḫān	-	900	226,a/06	1000	1580 ～ 1594	AN:iii,320; TA:ii,448 [77]
141	ii,448	ʻAlī Dūst Ḫān Bārbīgī	1000	-	-	1000	1593 ～ 1594	AN:iii,644; TA:ii,448 [78]
142	ii,448	Sulṭān Ḥusayn Ḫān	-	-	-	1000	1580	AN:ii,116 [79]
143	ii,448	Ḫwāǧah Šāh Manṣūr Šīrāzī	-	1000	225,b/04	-	1581	AN:iii,342
144	ii,448	Salīm Ḫān-i Sirmūr Afǧān	1000	?	-	2000	1583 ～	AN:iii,420 [80]
145	ii,448	Sayyid ǦHǦW Bārhah	-	500	227,b/17	3000	1559-60	AAtr:i,532 [81]
146	ii,448	Darbār Ḫān	*1000*	*700*	227,a/03	2000	1569	AN:ii,339; TA:ii,225
147	ii,449	Ḫāǧǧī Muḥammad Sīstānī	-	3000	223,b/24	1000	1575	AN:iii,160
148	ii,449	Muḥammad Zamān	1000	-	-	1000	～ 1594	TA:ii,449 [82]
149	ii,449	Ḫurram Ḫān	2000	-	-	2000	～ 1594	TA:ii,449 [83]
150	ii,449	Muḥammad Qulī Tūqbāʼī	*1000*	*1000*	225,b/12	1000	1575 ～	AN:iii,129
151	ii,449	Muǧāhid Ḫān	1000	-	-	2000	～ 1594	TA:ii,449 [84]
152	ii,449	Sulṭān Ibrāhīm Awbahī	-	-	-	1000	?	[85]
153	ii,449	Šāh Ġāzī Ḫān Turkmān	-	-	-	1000	?	[86]
154	ii,450	Šīrūyah Ḫān	*1000*	*900*	226,b/08	1000	1594 ～	AN:iii,655 [87]
155	ii,450	Kākar ʻAlī Ḫān	*1000*	*2000*	224,b/15	/	1574	AN:iii,82
156	ii,450	Naqīb Ḫān	*1000*	*900*	226,b/01	-	1614	JN:150(129)
157	ii,450	Bīg Nūrīn Ḫān	*1000*	*500*	227,b/08	/	1588 ～ 1594	AN:iii,531; TA:ii,450 [88]
158	ii,450	Qutlū Qadam Ḫān	*1000*	*1000*	225,b/05	1000	1575-6 ～	AN:iii,161 [89]
159	ii,450	Ǧalāl Ḫān Qūrčī	*1000*	*500*	227,b/09	1000	1575	AN:iii,158-9 [90]
160	ii,450	Šumāl Ḫān Qūrǧī	*1000*	*900*	226,a/18	1000	1577	AN:iii,199
161	ii,451	Mīr Zādah ʻAlī Ḫān	-	900	226,a/16	-	1587	AN:iii,522; MT:iii,326 [91]
162	ii,451	Sayyid ʻAbd Allāh Ḫān	*1000*	*700*	227,a/07	1000	1589	MU:ii,401
163	ii,451	Mīr Šarīf Āmulī	*1000*	*900*	226,b/06	3000	1606 ～	JN:28(22)
164	ii,451	Farruḫ Ḫān	-	500	228,a/04	1000	1594 ～	TA:ii,451 [92]
165	ii,451	Dawlat Ḫān SHARY Niyāzī	1000	-	-	/	～ 1594	TA:ii,451 [93]

[74]MU は彼が Ǧahāngīr 時代の最初には存命であったとしている。

[75]AH 990 / 1582-3 年に彼は著作活動を行っている (MT) から、死去はそれ以降でなければならない。

[76]彼は Sayyid Barakah の兄弟である (TA:ii,447)。Sayyid Barakah は Mīrzā Niǧāt Ḫān の兄弟である (AA:i,226)。しかるに AA:i,226 に Mīrzā Niǧāt Ḫān の兄弟として Mīrzā Ḥusayn Ḫān が言及されている。しかるに TA:ii,447 に対応する箇所で、TA MS AMU:257r は Mīrzā Ḥasan Ḫān としている。AN, THA, DhKh の諸史料も Ḥusayn ではなく Ḥasan の形を取っている。よって、AA に見える Mīrzā Ḥusayn Ḫān は Mīrzā Ḥasan Ḫān とされるべきである。ただし AA MS:117v は Ḥusayn の形を取っているため、一定の留保を付けなければならない。AAtr:i,483 は彼の名を Mīrzā Ḥusayn Ḫān と定めたが、以上の操作から、賛成できない。

[77]TA 著作当時には彼は死去していた (TA:ii,448)。

[78]TA 著作当時には死去していた (TA:ii,448)。

[79]特徴に乏しい名前だが、Sulṭān Ḥusayn Ḫān Ǧalāyir に同定できる。

[80]AAtr:i,482 はこの人物を Salīm Ḫān-i Kākar ʻAlī に同定する。しかしこの推定を支える積極的な材料は史料に見いだせない。AAtr:i,482 は言及していないが、仮にこの Kākar ʻAlī が Kākar ʻAlī Čištī (AA:i,224) に同定できるとすれば、MU:iii,148-9 によって再現できる彼の履歴および Čištī というニスバと、Sirmūr 出身の Afǧān というこの Salīm Ḫān とが親子関係にあることを説明するのはきわめて難しい。また史料に見える Salīm Ḫān (AN:iii,125,137,353,417,520,521,531), Salīm Ḫān-i Kākar (TA:ii,242; AN:iii,14), Salīm Ḫān-i Sirmūr (AN:iii,314,420), Salīm Ḫān Lūḥānī (AN:iii,650), Salīm Ḫān Mandūrī (AN:iii,649) を各個いずれに同定するか、現段階では不可能である。AN:iii,420 は Salīm Ḫān-i Sirmūr として、史料に見える最後の言及である。なお AAtr:i,482 は、彼が AH 1001 年までには死去していたとするが、根拠は不明。

[81]彼の墓は Majhera にあり、その碑文により彼の死去が AH 967 (1559-60) と定められる (AAtr:i,532)。

[82]TA の著作当時には死去していた。彼を同時代史料において同定できない。Athar Ali1985,36 は TA, DhKh を引いて AH 972 年の死去としているが、いずれの史料にも年代の情報は見えない。

[83]TA の著作当時には死去していた。

[84]TA の著作当時には死去していた。彼を同時代史料において同定できない。Athar Ali1985,8 は TA, DhKh を引いて AH 988 / 1590-1 年としているが、いずれの史料にも年代の情報は見えない。

[85]同時代史料において同定できない。

[86]同時代史料に現れる複数の Ġāzī Ḫān のいずれかに同定するか、現段階では不可能である。AAtr:i,491 は Šāh Ġāzī Ḫān b. Qāḍī ʻĪṣā (Qazwīn のサイイド Naqīb Ḫān Mīr Ġiyāṯ al-Dīn のおじ) に同定する。しかしこれは採用できない。Turkmān がサイイドの系譜に連なるとするなら、よほどの裏付けが必要であろう。

[87]TA 著作当時も存命である。1594.11 末の出来事を伝える AN の記事に見えるのが最後の言及。

[88]AN の同じ箇所を引いた Athar Ali1985,14 が彼の死去を AH 999 / 1590-1 年としているのは理解できない。TA 著作当時には彼は死去していた (TA:ii,450)。

[89]AA:i,225 では Qutluq Qadam Ḫān とされる。

[90]AA:i,227 は Ǧalāl Ḫān QWRČYN とするが、それに対応する AA MS:117v の形 Qūrǧī > Qūrčī は AN, TA に見える形と同じである。

[91]AN は治世 32 年 Amurdād 月 (1587.07-8) の死去と伝えるが、MT は AH 996 (1587.12.02 -) とする。ここではより詳しくクロノロジーを特定している AN を採る。

[92]TA 著作当時、存命であった。

[93]TA 著作当時には死去していた。TA MS AMU:257v は Dūst Ḫān PHARY とする。いずれの形にせよ、同時代史料においてこの人物は同定できない。

166	ii,451	Ǧa'far Ḫān Turkmān	*1000*	*1000*	225,a/16	2000	1572-3 ～ 1594	MT:ii,161; TA:ii,451 [94]
167	ii,452	Rāy Manūhar	-	400	228,b/14	/	1616	JN:182(157)
168	ii,452	Šayḫ 'Abd al-Raḥīm Lakhnawī	-	700	227,a/15	-	1585-6 ～	AN:iii,479 [95]
169	ii,452	Mīr Abū al-Muẓaffar	-	500	228,a/12	1000	1596-7 ～	AN:iii,718
170	ii,452	Rām Singh	-	900	226,b/14	1000	1615	JN:171(148) [96]
171	ii,452	Rāy PTR Dās	-	700	227,a/14	-	1623	JN:408(358) [97]
172	ii,452	Ǧāniš Bahādur	-	500	228,a/07	-	1601	AN:iii,787
173	ii,452	Muḥammad Ḫān Niyāzī	-	500	228,a/11	-	1627-8	DhKh:i,164
174	ii,453	Rāmdās Kačwāhah	-	500	228,a/10	5000	1613	JN:143(123) [98]
175	ii,453	Mīr Abū al-Qāsim	-	500	228,a/23	1000	1598	AN:iii,739
176	ii,453	Ḫwāǧah 'Abd al-Ḥayy	-	500	228,a/02	1000	1599 ～	AN:iii,764
177	ii,453	Šams al-Dīn Ḥusayn	*1000*	*900*	226,b/03	/	1632	BNL:i,409
178	ii,453	Ḫwāǧah Šams al-Dīn Ḫāfī Inǧū	-	900	226,a/23	-	1600-1	AN:iii,772
179	ii,453	Mīr Ǧamāl al-Dīn Ḥusayn	*1000*	*900*	226,b/04	3000	1623 ～	JN:409(359)
180	ii,453	Šayḫ 'Abd Allāh Ḫān	*1000*	*900*	226,b/13	3000	?	[99]
181	ii,454	Sayyid Rāǧū Bārhah	*1000*	*900*	226,b/05	/	1596	AN:iii,700
182	ii,454	Mīdinī Rāy Čawhān	*1000*	*700*	227,a/16	1000	1590 ～	AN:iii,581
183	ii,454	Mīr Ṭāhir Riḍawī	-	?	-	/	1591 ～	AN:iii,601 [100]
184	ii,454	Tāǧ Bīg Kābulī	-	?	-	/	?	[101]
185	ii,454	Aḥmad Bīg Kābulī	-*	700	227,a/09	/	1618	JN:364(233)
186	ii,454	Šīr Ḫwāǧah	-	800	226,b/17	/	1628	BNL:i,200
187	ii,454	Ṭāhir-i Sayf al-Mulūk	-	700	227,a/19	1000	1594 ～	TA:ii,454 [102]
188	ii,455	Muḥammad Qulī Turkmān	-	600	227,a/22	1000	1606-7 ～	MU:iii,342 [103]
189	ii,455	Tūḫtah Bīg Kābulī	-	700	227,a/13	/	1604-5 ～	TAN:832 [104]
190	ii,455	Mīrzā 'Alī 'Alam Šāhī	-	500	228,a/09	-	1580-1 ～	AN:iii,298
191	ii,455	Wazīr Ǧamīl	-	700	227,a/18	/	1605-6 ～	JN:08(08) [105]
192	ii,455	Bhūǧ	*1000*	*900*	226,b/15	1000	1607-8	MU:ii,141
193	ii,455	Mīr Abū al-Qāsim Namakī	-	700	227,a/17	3000	1607 ～	JN:45(50) [106]
194	ii,455	Baḫtiyār Bīg Turkmān	-	600	227,a/23	/	1595 ～	AN:iii,666
195	ii,455	Amīr Ṣadr-i Ǧahān	-	700	227,a/12	/	1611-2	MU:iii,350
196	ii,456	Ḥusayn Bīg	-	900	226,b/07	/	1602-3 ～	TAN:820 [107]
197	ii,456	Šādmān	-	500	228,a/05	/	1611-2 ～	JN:116(99)
198	ii,456	Rāǧah Muktaman	-	500	228,a/21	2000	1584-5 ～	AN:iii,475
199	ii,456	Bāqī Safarčī	-	-	-	1000	?	[108]
200	ii,456	Farīdūn Barlās	-	500	227,b/23	-	1614.09	JN:152(131)
201	ii,456	Bahādur Ḫān Qūr-dār	-	400	228,b/18	/	1594 ～	AN:iii,654 [109]
202	ii,456	Šayḫ Bāyazīd Čištī	-	400	228,b/09	/	1610 ～ 1618	JN:98(82), 297(262) [110]

[94]TA 著作当時には死去していた。

[95]AN に見えるのが最後の確実な言及。彼のニスバは TA:ii,452 において Lakhnawtī だが、TA MS AMU:257v の LKNHWY から Lakhnawī と再建した。この形の正しさは AN:iii,479 から裏付けられる。

[96]TA:ii,452 で Rāǧah ASKRN の息子とされるこの人物は、Rāǧah Rāǧ Singh b. Rāǧah ASKRN Kačhwāhah に同定できる。諸史料において、彼の名を Rām Singh とする例は他に見いだせないことから、これは Rāǧ の誤記と考えることも可能である。

[97]AA:i,227 は彼を Rāy TBR Dās Khatrī とする。TBR について AA MS:117v の BTR という形から PTR を導くことができる。

[98]DhKh の manṣab 値は Ǧahāngīr 時代のもの。

[99]没年はまったく不明。

[100]AAtr:i,538, 603 は彼を AA:i,228 に見える Mīr Ṭāhir Mūsawī に同定している。Athar Ali1985 もこれに従っている。Abū al-Faḍl は、Riḍawī と Mūṣawī とを区別していないという AAtr:i,538 の説明の評価も含め、現段階では判断を下せない。

[101]AAtr:i,508 は彼を AA:i,226 に見える Tāš Bīg Ḫān Muǧul に同定している。たしかに、AAtr:i,508 を支える材料もある。この人物が Kābulī とされているのと同様、Tāš Bīg も Kābulī と見なされている (AN:iii,473)。また、この人物が Šāh Bīg の集団 (ǧargah) に属しているとされているのと同様、Tāš Bīg が Šāh Bīg Ḫān とともに行動している例が見られる (AN:iii,473)。しかし Tāš Bīg Ḫān Muǧul と Tāǧ Bīg Kābulī とを結ぶ史料上の記事は発見できない。Tāǧ Bīg の称号は治世 42 年 (1597-8) に与えられたものであるとする MU:ii,482 の記事を AAtr:i,508 は引くが、そうだとすれば、1594 年に成立している TA にその称号が反映するのは矛盾している。よってここでは AAtr:i の説に従わず、同定不能としておく。ただし、TA MS Rampur では、この人物の名の Tāǧ は Tāš と綴られているので、TA の誤記の可能性も捨てきれない。

[102]TA 著作当時は存命であった。

[103]Ǧahāngīr 治世 2 年 (1606-7) 年には存命であった。

[104]TA:ii,455 は NWḪTH とするがまずまちがいなく AA, AN の採る Tūḫtah に改めることができる。

[105]TA:ii,455 は ǦYML とするが、AA:i,227; MU:iii,928-9 に見えるとおり、これは Ǧamīl の誤記に違いないので改めた。

[106]彼の名 Namakī は、諸史料において Namakīn とある。Namakī の形を取るのは TA のみ。この Namakīn は TMKYN と書かれている場合がきわめて多い。その甚だしい頻度からは、彼が Tamkīn「強化」という別名を持っていた可能性さえある。なお彼は、最近あらためて利用され始めたインシャー史料 *Munša'āt-i Namakīn* の著者である。

[107]AAtr:i,504 は Ḥusayn Bīg は誤りであって Ḥasan Bīg が正しいとしているが、従えない。AN, TA, MU いずれにおいても、Ḥusayn Bīg のかたちをとっているからである。唯一、AN:iii,478 に Ḥasan Bīg のかたちが見えるがおそらくこれこそが誤記として処理されるべきであろう。なお、この人物の死去の年代について、AAtr は Ǧahāngīr 時代に活動する Ḥasan Bīg Badaḫšī に彼を同定した上で、確定しようとするが、この人物が Ḥasan Bīg でないと確認した今、この論は採用できない。

[108]同定できない。Akbar 治世に活動する Bāqī Ḫān なる人物を彼に同定しようとするのが AAtr:i,448。AAtr は TA の記事を引いて、Ṭāhir Ḫān の息子が Bāqī Ḫān であるとしているが、同時代史料からは、Bāqī Safarčī と Bāqī Ḫān を結ぶ材料は得られない。

[109]TA:ii,456 の文章からは判然としないが、TA 著作当時には彼は存命のはずである。なぜなら、彼の活動についての最後の言及として AN の 1594.09 の記事がみられるからである。

[110]JN:98(82) では、Ǧahāngīr 治世 5 年中の活動が伝えられる一方、JN:297(262) ではすでに死去して Fatḥpūr の Šayḫ Salīm 廟のそばに埋葬されているとされている。

凡　例

— ヒジュラ暦の年代はAHを付して特記した。また各月の略号は以下の通り。
Muh ; Saf ; RabI ; RabII ; JumI ; Raj ; Shab ; Ram ; Shaw ; DhQ ; DhH.

— Akbar時代に通行するIlāhī暦はAkbar即位の年を元年とし，春分を年始とする太陽暦である。本稿において「治世〜年」とする場合，Ilāhī暦年を読み替えたものであると了解されたい。ただし，史料の引用においてはこの限りでない。

— 年月日はピリオドで区切って示した。

— ユリウス暦からグレゴリオ暦への移行は1582. 10. 15とする。

参考文献

AA : Abū al-Faḍl, *Ā'īn-i Akbarī*. (H. Blochmann (ed.), Calcutta [Frankfurt am Main], 2 vols., 1872 – 77 [1993].)

AA MS : British Library, Add. 7652, not dated (17 C.)

AAtr : H. Blochmann (vol. 1) & H. S. Jarrett (vol. 2, 3), rev. ed. D. C. Phillott & J. Sarkar, 3 vols., Calcutta [New Delhi], 1927 – 49 [1989].

AN : Abū al-Faḍl b. Mubārak, *Akbar Nāmah*. (Āġā Aḥmad 'Alī & 'Abd al-Raḥīm (eds.), 3 vols., Calcutta, 1877 – 1887.)

ANtr : H. Beveridge (tr.), 3 vols., Calcutta [New Delhi], 1902 – 39 [1989].

BN : Ẓahīr al-Dīn Muḥammad Bābur, *Bābur Nāmah*. (間野英二『バーブル・ナーマの研究 I　校訂本』松香堂，1995.)

BNL : 'Abd al-Ḥamīd Lāhawrī, *Bādšāh Nāmah*. (Kabír al-Dín Ahmad & A. Abd al-Rahím (eds.), Calcutta [Osnabrück], 1865 – 68 [1983].

DhKh : Šayḫ Farīd Bhakkarī, *Ḏaḫīrat al-Ḫawānīn*. (Syed Moinul Haq (ed.), Karachi, 3 vols., 1961 – 74.)

DhKhtr : Ziyaud-Din A. Desai (tr.), Part 1, Delhi, 1993.

IAF : Nūr al-Dīn Muḥammad, *Inšā'-i Abū al-Faḍl*. (Lakhnaw, AH 1299.)

IAn : *Indian Antiquary*.

JN : Ǧahāngīr, *Ǧahāngīr Nāmah*. (Muḥammad Hāšim (ed.), (Publisher : Bunyād-i Farhang-i Īrān), 1359 Sh. ; Syud Ahmud (ed.), Ally Gurh, 1864.) 前者の新たな校本の方が良質と判断される。だが前者の存在さえほとんど知られていない学界の現状に鑑み，本稿の引用では，後者の参照を丸括弧に入れて示した。

MJ : Ḫwāǧah Kāmgār Ḥusaynī, *Ma'āṯir-i Ǧahāngīrī*. (Azra Alavi (ed.), Bombay, 1978.)

MLC : Antonius Monserrate, *Mongolicae Lagationis Commentarius*. (H. Hosten (ed.), 'Jesuit letters and allied papers on Mogor, Tibet, Bengal and Burma, part I : Mongolicae Legationis Commentarius', *Memoirs of the Asiatic Society of Bengal*, 3 –9, 1914, pp. 513 –

704.)

MS : Mullā Qāṭi'ī Harawī, *Maǧma' al-Šu'arā'*. (Muḥammad Salīm Aḫtar (ed.), Karāčī, 1979.)

MT : 'Abd al-Qādir Badā'ūnī, *Muntaḫab al-Tawārīḫ*. (Aḥmad 'Alī & Kabīr al-Dīn Aḥmad (eds.), 3 vols., Calcutta [Osnabrück], 1864 – 9 [1983].)

MU : Šāh Nawāz Ḫān & Ġulām 'Alī Āzād & 'Abd al-Ḥayy, *Ma'āṯir al-Umarā'*. ('Abd al-Raḥīm & Mīrzā Ašraf 'Alī (eds.), Calcutta, 1887 – 95.)

NM : 'Alā' al-Dawlah Qazwīnī, *Nafā'is al-Ma'āṯir*. (Maulana Azad Library (Aligarh Muslim University), Subhan Allah Collection, 920 / 45. (dated AH 1085 / 1674))

PIHC : *Proceedings : Indian History Congress*.

RT : Ṭāhir Muḥammad Sabzawārī, *Rawḍat al-Ṭāhirīn*. (British Library, Or. 168. (dated AH 1045 / 1635 – 6)).

TA : Niẓām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī*. (B. De & M. H. Husain (eds.), Calcutta, 3 vols., 1913 – 41.)

TA MS AMU : Maulana Azad Library (Aligarh Muslim University), Subhan Allah Collection, 954 / 3. (dated AH 1003 / 1594 – 5)

TA MS Rampur : Rampur Raza Library, 2027 / 1826 M. (dated AH 1041 / 1631)

TAtr : B. De & B. Prashad (trs.), 3 vols., Calcutta [New Delhi], 1911 – 40 [1992].

TAN : 'Ināyat Allāh, *Takmilah-i Akbar Nāmah*. (Āǧā Aḥmad 'Alī & 'Abd al-Raḥīm (eds.), *Akbar Nāmah*, vol. 3, pp. 803 – 843, Calcutta, 1886.)

THA : Bāyazīd Bayāt, *Taḏkirah-i Humāyūn wa Akbar*. (M. Hidayat Hosain (ed.), Calcutta, 1941.)

TW : Ǧawhar Āftāba-čī, *Taḏkirat al-Wāqi'āt*. (British Library, Add. 16711. (dated AH 1019 / 1610))

Athar Ali, M. (1985) *The apparatus of empire : awards of ranks, offices and titles to the Mughal nobility (1574–1658)* , Delhi.

Beach, C. M. (1981) *The imperial image : Paintings for the Mughal court*, Washington D. C..

Beveridge, H. (1903) A new MS. of the Akbarnama. *JRAS*, 1903, 115 – 122.

Codrington, O. (1892) Catalogue of the Arabic, Persian, Hindustani, and Turkish MSS. in the Library of the Royal Asiatic Society. *JRAS*, 1892, 501 – 569.

Habib, I. (1968) The mansab system, 1596 – 1637. *PIHC* 29, 221 – 242.

Ibn Hasan (1936 [1980]) *The central structure of the Mughal Empire*, Oxford [New Delhi].

Köprülü, M. F. (1942 [1979]) Bahşi. *İslâm Ansiklopedisi*, 2, 233 – 239.

Moosvi, S. (1981) The evolution of the manṣab system under Akbar until 1596 –7. *JRAS*, 1981, 173 – 185.

Moosvi, S. (1987) *The economy of the Mughal empire c. 1595 : a statistical study*, Delhi.

Morley, W. H. (1854) *A descriptive catalogue of the historical manuscripts in the Arabic and Per-*

sian languages, preserved in the library of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London.

Mukhia, H. (1976) *Historians and historiography during the reign of Akbar*, New Delhi.

Okada, A. (1992) *Imperial Mughal painters: Indian miniature from the sixteenth and seventeenth century*, Paris.

Qaisar, A. J. (1961) A note on the date of the institution of mansab under Akbar. *PIHC* 22, 155－157.

Smart, E. S. (1978) Six folios from a dispersed manuscripts of the Baburnama. Falk, T. et al. (eds.), *Indian painting: Mughal and Rajput and a Sultanate manuscript*, London, 109－132.

Smart, E. S. (1986) Yet another illustrated Akbari Baburnama manuscript. Skelton, R. et al. (eds.), *Facets of Indian art*, London, 105－115.

Smith, V. A. (1915) The date of Akbar's birth. *IAn* 44, 233－244.

小名康之 (1985) ムガル帝国の支配体制—マンサブダーリー制—『中世史講座 4　中世の法と権力』学生社, 53－79.

肥塚 隆(編) (1993)『V & A ヴィクトリア & アルバート美術館展　インド宮廷文化の華　—細密画とデザインの世界—』NHK きんきメディアプラン.

(京都大学人文科学研究所)